



基本CG 14+6枚
本編 120枚
おまけ 165枚

部下が自慢していた嫁を
夫のためと勘違いさせて
調教してあげた話
～オモテ～

失敗した。

上司に誘われて投資に挑戦したはいいものの、
見事に大失敗。

妻に内緒で貯金を使っていたけど、その数倍の額の
損失をだしてしまった。

いきなりの借金生活の危機。

新しい家に引っ越しをしたばかりでなにかとお金が
必要な時に大変なことをしてしまった。

そんな話を投資に誘った上司にしてみると、なんと彼は
自分とは逆に大きく成功しかなり儲けたらしい。
うらやましい限りだ。

こっちはどうやって妻に打ち明けようか
悩みっぱなしなのに…。

そんな僕を見かねてか、
彼が「助けてあげようか」と言ってきた。

「投資をしてみないかともちかけたのは私だからね。責任を感じるどころもあるし、大事な部下だからね」
「本当ですか!? 助けてくれるなら
本当にありがたいです。ぜひお願いします」

決して少なくない金額の損失をすべて払ってくれる
というのだから本当に驚きだった。

「でも…本当にいいんですか? こんな大金…」

「こっちはその額以上に大儲けしたからね。あぶく銭だし、全部払っても全然余裕があるから」

余裕な感じで笑い、とてつもなくうらやましいことを言う。

「それにしてもそんなやり方をしていたとは…」

「よく君が話をしてくれる自慢の嫁さんを」

悲しませるようなことをしちやダメだよキミ」

「うっ…はい…」

普段からついつい僕の妻である育代について惚気話を
してしまうせいも、時々こうしていじられるのだった。

それからしばらくして酒も進み、結局いつものように妻の惚気話をしてしまっていた頃――

「それにしても夫婦仲がよさそうで本当にうらやましいね。私も別に仲が悪いわけじゃないが、そういう情熱はもうないなあ」

「そうなんですか？」

「そういうものだよ」

今の自分には全く想像できない。何年たっても嫁のすべてがかわいい。色々と支えてもらっている。感謝の気持ちと愛情が薄れるなんて考えられないのが正直なところだ。

「ああそうだ、君の損失を肩代わりする代わりとってはなただけど」

急に思いついたような口調で話を振ってきた。

「君の嫁さんを今度紹介してくれないかな」

「えっ」

「こんな若い美人さんと関わりあうことなんて

あまり無いからね。ちょっと話をしてみたいなと思っていたんだ」

僕のスマホの待ち受け画面に映る育代の写真を

見ながら彼が話す。

「若いって…もう僕も妻も三十半ばですよ。若くなんて…」

「ははは、私から見れば十分若いよ。……で、どうかな？」

「えーと、それは……」
別に何かあるというわけでもないだろうけれど、
あまり気乗りしない話だった。

「嫌かい?」

「まあ嫁さんが浮気するかもしれないと思うのはわかるが——」
「**育代はそんなことしませんよ!**」
妻を軽く見るような言葉にムツとなり、
つい強く否定してしまっ。

「本当にそう思っているなら、私と会って少し話を
するくらいいいだろう?」

私と君も短い付き合いじゃないんだし」

「……まあ、そうなんですけど」

「ま、それだけ嫌がるのもものすごく愛しているって
証拠なのかな? 悪いことじゃないんだろ?」
「またいつものように妻への愛をいじられる。」

「…わかりました。」

もともとも助けてもらおう側ですし………いづですよ」
「おっ」

「ただ……期待しているような反応がなくても怒らないでくださいよ?」

「育代は僕意外の人と付き合ったこともないですし、見た目の雰囲気と違ってしっかりしてますから」

あくまで夫の上司としての話し相手にしかありませんよ?」
「何を言ってるんだ、そりや当り前じゃないか。」

妙な期待なんてしてないよ」
早口になっている僕に、さらっとそんな言葉を返しつづ次に頼むお酒を選んでいる。

「でもまあ、もし話が合ってデートをするようなことになっても許してくれよ」

「ははは、別にいいですよ」

わざとデートを強調し、冗談っぽく話す彼の言葉に相槌をうつ。

「まあ、僕たちはお互いべた惚れですから間にはいるのは難しいと思いますけどね」

「ほほお、言っつねえ」

その後もお互いに挑発しあうようなふざけた会話をしながらお開きの時間になった。

帰り道、勢いで約束してしまったことを思い返し、後悔の気持ちがあふれてくる。

結局、売り言葉に買い言葉のような感じで、上司に嫁の育代を紹介することになってしまった。しかも理由をつけて2人きりで会うように、僕から仕向けるといふ形で…。更には、はじめは一度だけという話だったのに、金額の大きさの話を持ち出されて、5回も会う機会を作るといふ話になってしまった。一度会わせてくれるごとに5分の1ずつ支払ってくれるらしい。

「失敗したなあ…なんであんなこと約束しちゃったんだ…」
負い目があるにしてもちよつと軽率だった。
自分の失敗をごまかすために育代に同意をえないまま勝手に話をすすめてしまうなんて…。
改めて考えるとひどい話だ。

『家族には言えないなあ…こんなこと…』

『……でもこれで悩んでたことは解決するんだよな』
育代に最近様子が変だと心配されるほど悩んでいたことが、
思わぬ助け船で解決しそうなのは確かだった。

『僕の育代に限って、ほかの男と変な関係に
なる心配はないしなあ』

ましてや僕の知っている上司だ。絶対にありえないと言い切れる。
そう考えるところこちらが損をすることなんて全くない。
むしろ僕の嫁と少し話をするだけで大金をだしてくれる
上司は本当に人がいいだけに思えてくる。

『——案外、あの条件も僕に負い目を
感じさせないためなのかもな』

いままでの仕事上での付き合いや信頼も手伝って、
上司の言動を肯定的にとらえる気持ちが強くなる。

家に着くころには、不安に思っていた気持ちは
すっかり晴れ、ただ悩みが消えた喜びだけが残っていた。

「ただいまー！」

「おかえりなさい！お父さん！」

「おかえりなさい博司さん。今日はずいぶん機嫌がいいのね」
「そうかな？ まあちよつとうれいことがあってね——」

愛する妻と娘に迎えられ、改めて幸せを感じる僕なのだった。

「…ただいま」

誰もいないアパートに帰ってきた私は、

誰もいない室内にむけて習慣付いた挨拶をする。

嫁とはだいぶ前から別居生活となり、

近頃は返事がないことに寂しさを覚えることもなくなった。

とりあえず今日は良いことがあり気分がいい。

オナリたいところだが…今日からしばらくは禁止だな。

今後のことを考えると溜めておいたほうがいい。

この気分のままさっさと布団にはいろう。

布団の中で今日のことを思い返す。

美人の嫁をもらっていつも惚気話をして…

いい部下ではあるがプライベートの境遇については

内心イラつくことが多かった相手。

そんな彼が投資に失敗して大損、助けが必要な状況になった。

助けてもらう代わりに愛する嫁を知り合いの

男に差し出すことになってしまっ…ふふふ。

『損をするように仕向けたのは俺だけだな』
□元がにやける。

正直、ここまでうまくいくとおもってなかったが、
天は私を見捨てていなかった。

嫉妬心から彼に痛い目を見せてやるって

ヤバそうな投資を勧めてみたところ

なんの疑いもなく話に乗ってくれた。

私をそんなに信じてくれていたとは嬉しい限りだ。

結果、彼は予想以上の損をし、私を頼らざるを得なくなった。

さて、あとは偶然が重なって生まれたチャンスをも

モノにするだけだ。

うまいこと言いくるめて一回でもセックスしてしまえば

どうにでもなるだろう。

弱みをどんどん増やして、逃げられなくすればいい。

そうだったらあとは飽きるまでたつぷりと楽しむだけだ。

旦那以外経験が無いらしいが…

『俺が旦那以外のチンポを欲しがる

ドスケベ女に変えてやるからな、育代…！』

それから数回、何度か彼を酒に誘った。
交渉をうまく進めるための材料を集めるためだ。
こちらのおごりですっかりと酔わせ、
上機嫌にさせて使えそうな話を引き出した。

そして――
準備が整った俺は、彼に連絡をした。

「今週中にでも約束の件、セッティングしてくれるかな？」
「わかりました。妻に僕から言っておきます」
「1度目ってことでいいね」
「はい」

あとは用意した材料でうまく墮とせることを祈るだけだ。



私の名前は育代といいます。
愛する夫とかわいい娘がいるごく普通の主婦。
つい最近新しい家への引越しを終えて、
穏やかで幸せな生活を送っています。


近頃、夫の博司さんが妙にそわそわしています。
理由を聞いてみても詳しくは教えてくれません。

ある日、妙な連絡がありました。

「会ってほしい人がいる」

いきなりの話。

理由を聞いてもはつきりとしない感じでごまかされてしまった。
とにかく会って話をしてほしい、とのこと——。
博司さんがこんな頼みをしてくるなんて
今までにないことでした。
きつと何か言いづらい事情があるんだと思い、
とりあえず承諾しました。



夜遅く。
娘も2階にあがって寝てしまった時間。
博司さんから連絡があったとおり
家に男の人が訪ねてきました。

彼は博司さんの上司で、いつもお世話になっている人らしい。
なぜ急にそんな人が来たのかはわからないけど、
博司さんが帰ってくるまで私が相手をするようになりました。

お茶を出し、あたりさわりのない雑談をする。
そんな時間がしばらく続いた後、
彼は言い辛そうにある話を切り出してきた。

「今日お宅を訪ねた理由なんですが…実は彼に、
特殊な性癖があって悩んでいると相談されましたね」

「……………は？」
「自分の嫁が他の男に抱かれているところが見たい、って」
「……………あのですねえ」

唐突にとても不愉快な話をされ、博司さんの
上司であることも忘れてとげのある声がでてしまう
『博司さん、なんでこんな失礼な人を家に…』
そう思う私をよそに、かまわず話をつづけてくる。



「まあこんな話をされても、そんな顔になりますよねえ」
厳しい表情になる私を見て、苦笑している。

「こんな趣味、人には言えませんからねえ…まして家族には。
あなたにはずっと隠してきたらしいんですが…」

「博司くんから聞きましたよ。」

もう長いことセックスレスだとか。」

「…っ、なにを言ってるんですか」

『たしかにもうずっと…してないけど』

「この話、そのことにも関係してるんですよ」

初対面の人から夫婦の性生活について
話をされるなんて思いもよらなかった。

「普通のセックスではマンネリで——」

「そのせいかあまり勃たなくなってきたそうで——」

「刺激が欲しいと彼に相談されて——」

「——ということわけで私が君と

セックスしてほしいと頼まれたんですよ」

到底理解できない話をべらべらと話す男に、嫌悪感が高まる。

『私がこの人と浮気することを望んでいる…？
博司さんが？』

ばかばかしい話すぎて聞く気にならなかった。



「お話はそれで終わりですか？」

「む……」

「そんなこと、到底信じられません。」

夫の上司の方に失礼なことは言いたくありませんが……もう帰っていただけですか。」

今日のこととは聞かなかったことにしますから」
怒りをできるだけ抑えて、はっきりと告げる。

「ふむ……うーん……」

さすがに相手も空気を察したのか言葉に詰まっている。

「……わかりました。では最後にこれだけ聞いてもらいたい」

そう言って彼はボイスレコーダーを取り出した。

「彼の名誉のためにも、これをあなたに聞かせたく
なかつたんですが……信じてもらえなければ

どうすることもできませんからね」

『博司さんのために……?』

拒否する間も無く、再生がはじまった。



2人の声が聞こえる。
声は…博司さんとこの人のようだった。
夫婦の性生活についての話をしている。

『博司さんだったら、なんでそんな話をこの人にしてるの…?』
恥ずかしさに顔が熱くなってくる。

「最近嫁さんとはセックスしてないのかい?」

「そうですね、もうそういう目じゃ見れないっていつか…」
「え…」

聞き間違いだと思いたくなる言葉に驚き、声が漏れる。

「まあ趣味は人それぞれだからね…」

嫁さんには言えないこともある」

「そうですね…」



「それなら、私が手伝ってあげようか?」

「もちろんこの話は奥さんには内緒にするし、
バレないようにする」

「本当ですか!? 助けてくれるなら本当にありがたいです。
ぜひお願いします」

『なにを…いつているの? 博「や」—』

「よし。改めて聞くが…君の嫁さん、抱いてもいいんだね?」

「はい。僕からもお願いします!」

「?!?」

レコーダーが止まり、静かになる。

「どうかね?これでも私の言ったことが信じられないかな?」

「そっ…! そんなの! 何かの間違いに決まっています!」

「彼本人の口から出た言葉なの!?」

「…でも…!」

「彼に悩んでる素振りとか、いつもと違う様子はなかったかな?」

「それは…」

心当たりはあった。



「と、とにかく、本人に確認してみます。」

今日はもう帰ってくださいー！」

「やれやれ…」

大げさな溜息をつきながら――

「君に言いづらいからあれだけ悩んだ末、

私に相談してくれたのに…

彼の気持ちを考えてあげられないんだね。少し同情するよ」

暗に、私が夫の気持ちを汲めない酷い妻だとしても

言いたげな言葉だった。

「まあいいさ。今日はもう帰るとするよ。博司くんによろしく」

「……………わかりました」

「ああ、そうだ…彼がああいった性癖ということは

知らないふりをしてあげてほしい」

「……………」

「彼の悩みを解決してあげたくてつい言ってしまったが…

本来、秘密にするはずだったんだ。

彼との信頼関係が崩れて仕事に支障が出るかもしれない。

それに何より…君に絶対知られたくないと

言っていた彼が傷つくからね。じゃあ。」

(ボタン)

拍子抜けするほど簡単に、彼は家を出て行った。

残された私は……………さっき聞いた言葉を改めて思い返していた。

「ふーっ……ミスったかな」
帰りのタクシーの中で脱力する。
もっと簡単に言いくるめられると思ったが、あの嫁、
案外ガードが固かったな。

こここのところ酒に誘ってはネタになりそうな発言を
彼から引き出して、都合よく編集をして…
ツギハギだらけの、なんとかでうちあげた切り札の
ボイスレコーダーだったが、どれだけ効果があったか……。
『また別の手を考えなきゃならんかな…』
もう警戒されて厳しいか…?』

とりあえず彼に連絡をする。
「今日はもう帰ることにするよ。君は良い嫁さんな
もらったね。とても楽しい時間を過ごせた。
約束した分のお金は明日にでも払っておくよ」

簡単な連絡を終え、目を閉じて思索する。
今日の感じだと金の払い損に終わりそうな状況だ。
さっきの話も旦那に全部話してしまうかもしれない。
『素直に借金を払う代わりに嫁のカラダを
差し出すように取引するべきだったか?』
だがそれだとせいぜい数回しかやれない上、
風俗で女を買うのとあまり変わらないからなあ…。

「どっしたもんかねえ…」

しかし諦めきれない俺は、次に会った時の
交渉方法を考えることにした。



「ただいまー」
玄関から博司さんの声が聞こえる。

リビングにきた博司さんは機嫌がよさそうだった。
それとなく理由を聞く。

「今日会わせた人、僕の上司だって言っただろ？」

あの人にちよつと悩みを打ち明けてね。

それが解決しそうなんだ」

「悩み…」

あの人から聞いた話と一致する。

「解決しそうならよかったわね。」

で、どんな悩みだったの？聞かせてくれない？」

「いやあ、それがその…この悩みっていうのがちよつと

恥ずかしい話で…育代には相談できなかつたんだ」

くちごもる博司さん。

「……どうしても教えてくれないの？」

「ごめん、詳しくは言いたくないんだ…ほんとごめん！」

「そっか…うん、わかった」

『それって…私にあの人と浮気してほしいっていう話だから？』
はつきり聞きたい気持ちをグッと飲み込み、探りをいれる。



「でも相談にのってくれたっていうのはわかったけど…
なんで急にあの人のことを私に紹介したの？」

「いや、それはその……」

また何かをごまかすような感じになる。

「代わりというか、んー…と、
悩みを解決してもらったために仕方なくというか…」

「とりあえず根はいい人だよ。」

変わったところとか厳しいところもあるけど

大変な時はちゃんと助けてくれるし、約束も守ってくれる。

育代もあんまり嫌わないでほしいな」

明言を避ける博司さん、それに妙に彼をもちあげる言葉…

それらが、彼がいていた博司さんの隠された望みと

結びつくように感じられてしまう。

『まさか…本当に?』

震えてしまいそうになる唇を抑えつつ、できるかぎり

平静さを装って聞いてみた。

「私があの上司の方と会うことが、その…

博司さんの悩みの解決に役立つ…の…?」



「そうだね。しばらくはあの人に付き合ってもらえると助かるかな」

「…………そう…………うん、わかった。」

博司さんがそう言うなら」

ぎこちなく笑いを浮かべて、席を離れる。

それ以上は、怖くて聞けなかった。

例の会話を私が聞いてしまったことは

気付かれなくなかったし…

何より、「ほかの男に抱かれてほしい」なんて話が

博司さんの口からでてしまったら…

きつともものすごくショックで…辛くて泣いてしまう。

もしかしたら彼が言う通り、博司さんはこれまで

我慢していたのかもれない。

ここ最近、ふと目を向けると辛そうな顔をしているのも、

もうずっとエッチのお誘いがないのも、全部……

「私が悪かった…の、かな……………」

良き妻だという思いは自惚れだったのかもしれない
と思うと、視界がにじんだ。

しばらく思い悩む日々が続きそうだった。

数日後。

また博司さんからの連絡がきた。

前と同じ…あの人と会ってほしいという連絡。

結婚して15年以上になるけど、これほど

不自然なことは今までなかった。

『そっついっこと…なの?』

最後の望みをかけて、断れないか聞いてみる。

「気が乗らないし、できればもう会いたくないな……断っちゃうだめかな? どうしても会わなきゃダメ?」
私知知っているいつもの博司さんなら…返事は……

「無理をいってごめん。でも僕を助けると思っ
て、頼むよ!」

「ごちうらごそごめんなさい。

やっぱり会ってみることにする。

わがまま言っちゃってごめんね。」

(ぱんっぱんっぱんっ)
録画状態になっているスマホの前で、
私は博司さん以外の人に抱かれていた。

「どうです奥さん、夫以外のちんぽは」
「……っ、別にっ…何も言うことなんて…んっ、ありません」
「おや？ 最初に見たときは驚いていたようですがねえ」
「…そうですね、っ、無駄に大きくて…痛くて…
早く終わってほしいです」
「ははは、そうですね？ 私はとても気持ちいいですよ」
「………」

ぱんっ

ぱん

ぱんっ

アアア

アアア

アアア

ググッ



彼が後ろで腰をお尻に叩きつけてくる。

そのたびに長くて太いアレが中を圧迫してくる。

『ほんと…キツ、い…っ』

博司さんとのセックスとは違い、限界まで押し広げられる感覚。
痛みばかりが気になるこの行為は最悪の気分だった。

「それにしても……夫の特殊な趣味のために好きでもない男に抱かれるなんてあなたは本当に夫想いの奥さんだ」
「くっ……そんな話は……いいですから……!」

『はやく、おわって……っ!』
アソコからの痛みと、博司さん以外の男に犯されているという痛みを、ぎゅっと枕を掴んで耐える。

ほんっ

ほんっ

ほんっ

グチャッ

グチャッ

グチャッ

っ

っ

「くっ……! ダメだ、そろそろ出るっ!」

(ぱんっ!ぱんっ!ぱんっ!)

動きが早くなり、アソコを彼のモノで乱暴に

「痛……あっ、だめっ! 中じゃなくて外に……っ!
絶対だめですよっ!」

「くっ……あああああ! 奥さん、奥さんっ!」

外に……

だめ!

!!

(グポオツ……)
ようやく抜いてくれる。
アソコから精液が溢れていくのが見なくてもわかる。
『こんなにいっぱい……こんな人のが、中に……』

「んんんんんんんんんん!!」
汚されてしまったことを強く自覚させられて
堪えようとしても泣けてしまう。

「大丈夫ですって、避妊薬なら用意しますから」
「うっ……そういつ問題じゃ……」

「元はといえば、奥さんが用意したゴムが小さすぎるせいでしょ」
「………あなたがおかしいんです……っ!」
私が買ってきたコンドームは……
博司さんとのエッチの時に使っていたサイズは、
彼のアレには全く入らなかつた。



「おっと、あまりゆっくりにしていると
帰りが遅くなってしまうですね」



はんっ

はんっ

はんっ

「あともう一発、パパッと
やらせてもらいますね」
「えっ、いやっ—」
「一回したら十分でしょ
……あああああう—」

こちらが言い終わる前に、
精液でドロドロに
なってしまったアソコに、
またアレがはいつてきた。



「あー、ほんと…グチャッグチャッの上に締めりがよくて、イイですよ」
(グチャッ、グジュッ！グチャッ！グジュッ！！)
「くっ……うっ……うっ……うっ……」

精液が膈内でかきませられ、泡立つような音が響く中、
嫌悪感を必死に耐える時間がまたはじまった。

(ザアアアア)

『やっと終わった…』

事後、彼はさっさと帰ってしまった。
私はというところ、一刻も早く身体の汚れを
落としたくてシャワーを浴びはじめたのだった。

ザアアアアアアアアア...

むちっ♡

『こんなことになっちゃって…本当によかったのかしら』

ふん♡

ふん♡

博司さんが望んでるどころか話を聞いてるだけで抱かれてしまった。
その事実が、時間が経つにつれ私の心に暗い気持ちを生んでいた。



帰り際、あの人が念を押している事があった。

それは、この関係について私から博司さんには言わないようにとの事だった。

「浮気したことを夫に話す妻がいますか？」

それじゃあ不自然すぎて興ざめです。

あくまでも奥さんは彼の趣味を

知らないこととしないことダメなんです」

ママママママ...

「彼は何も知らない奥さんが他の男に抱かれて欲しいんです。もし言ってしまったら、我慢してセックスしたことも無駄になってしまいますよ」

今日の動画は早速博司さんに渡す約束になっているらしい。

私を普通に口説き落とすことに成功したという事のこと……

『もし全てが勘違いだったとしたら……ただの浮気動画……よね……。そうだとしたら博司さんすごく怒って悲しむだろうな……。そうだったら……全部話して、必死に謝って……許してくれるかな……』

「……まだ入ってるような感じがする」
痛いほど大きく太いアレを入られたせいか、
まだ違和感が残っている。

ひび...

おは...は...は...

「あつ...」
（「ポツ...」）

しっかり洗ったつもりだったのに、「アソ」からまた精液が溢れてくる。
あの人に奥まで汚されたという事実がつきつけられる気分だった。



「……もういい加減、
きれいになってよ……」

汚れを完全に落とすには、
まだ時間がかかりそうだった。



普段よりもずっと長いシャワーを終えた後。
いけないことをしてしまった罪悪感で胸がいつぱいになり
何も手につかずリビングをうろろしていると……

「ただいまー」

博司さんが帰ってきた。

『もうあの人のこと、知ってる……のよね』
一体どんな反応をするんだろうか。

あんなこともうしたくない。
あの男が言っていたことは全部間違いであってほしい。
でもそうしたら……今日私がしたことは……

二つの思いがせめぎあっている。
そして博司さんがドアを開けてリビングにはいって——

「あはははははっ」
テレビを見て笑う博司さん。

拍子抜けするほど普段通りだった。
違いといえば…朝よりも機嫌がよさそうなことくらい。

「なんで？あの人から今日の…と見せられたんじゃないの？
わたし、すごく嫌だったんだよ…？
それなのに、何も…言ってくれないの？」

本音を言えば……僕が間違っていた、
もうあんなことしなくていい、って言ってほしかった。
……すこしだけ話を振ってみることにした。

「……機嫌がよさそうね」

「ん？ そう見えるかい？」

「ええ。…なにかあったの？」

「いや、前に話した悩みの話。」

「そういえば育代は今日、ちゃんと会ってくれたんだろ？」

「っ……！ ええ。ちよつと…会ったけど」

「おかげで悩みは順調に解決しそうだよ。」

「あんまり気が乗らないかもしれないけど、この調子で頼む！」

「わかった…うん、博司さんのためだもん、がんばるね」

『……やっぱり聞かなきゃよかったな』

結局、博司さんから

「もうあの人と会わなくていい」
という言葉はもらえなかった。



「くっ……んっ……んっ……んっ」
「ぴちゃ……くちゅっ……」
「……っ……っ……そんなふうな音が出るんですか……」

また博司さんからの連絡が入ってから2時間後。
今日は執拗に「アン」を口で愛撫されていた。

足先からはじまり、膝裏、肉ももを舐められた。
そして割れ目を舌でなぞったり、唇でついばんだり……
とがらせた舌で尿道や膣口を刺激したり……
敏感な突起をねぶられ、吸われ、弾かれた。
そんなことがもつずっと続いている。

「ぶっ……う、あ、くっ……っ……この人になれども
気持ち悪い……だけよ、こんなの……っ」

「まだ私のチンポがキツそうだからね。

こちらは強く擦れていても良い具合なんです
奥さんにも気持ちよくなってもいいらしいんですよ」

「そんなことされても……っ……
気持ちよく、なん、てっ……なりませんか」

今日も前回同様、撮影しながらのセックス。
レンズがこちらに向いている緊張感にはまだ慣れない。

「せめて、はやく挿れて終わってくれたほうが…うらやむ」
愛のないセックスなんて、はやく終わるほうがいい。
無駄に丁寧な前戯を不愛想に受ける。

「あなたが感じてくれたほうが、博司くんも喜んでくれますよ」
「なっ……！」

「この間の映像を見せた時も、そんなことを言っていましたからね」
博司さんがそんなことを？ 信じられない。でも…
「そんなの…そうだけど…すべては無理です」
「むむ…」

好意のない相手とのセックスで気持ちよくなんて
なれるはずがない。

びぢやあ…

「……ふむ、そろそろ入れますか」

「………」

諦めたのか、長い愛撫をようやく切り上げて挿入する体勢にはいる。

(ニヒッ…ぐいぬぬぬぬぬ)

「……………」

『やっぱり…大き…っ』

は
は

んんん…!

んんん…

チチ…

んんん…

アソコをたっぷりっほぐされたことも関わらず、キツク彼のモノがおなかの奥を圧迫して苦い。

『ほんっ、おちんちん…のよ…』

博司さんのおちんちんなら、

こんな苦しさを感じたこともないのよ…

セックスすること自体を嫌いになりそうだった。

(ヌチャッ、グチュッ、ヌチャッ)
「んっ、んっ……んっ………んっへん」
「んっ、んっ……気持ちさらさらかかっ」
「んっ、んっ……私の乳は、結構……ですかっ……っ」

「ちよっぴは甘く声も漏れてきたが……なかなか強情だな」



「じゃあ、そろそろ早くっっっっっっっっっ」

ゆっくりと深い動きから、早く膣内の奥を擦る動きに変わる。
挿入にあわせて時折、指で入口の上のあたりをいじられ、
痛みの中にも甘いしびれのようなものが混じる。
「は、くっ……うん、んっっ」

「いやー、出した出した」

具合のいい穴でたっぷり射精できた充実感でとても気分がいい。

適度な疲労感もあり、よく眠れそうだ。

「さて、寝る前に…」

撮影した映像をチェックする。

「ふむ…」

やはりおもったより反抗的だ。

終始、嫌そうな顔をしている。

こんな無理矢理な感じが出ている動画は…

見せられないな。

保留だ。

「ん———」

セックスの経験も大したことなさそうだし、もっと楽に快感に流されると思ったんだが…

「一途な女ってのは大好物なんだけどなあ」

さすがにこのままじゃ予定が狂ってしまう。

前に撮ったのもそうだが、こんな動画を博司に見せても精神的ダメージを与えられない。

それどころか怒ってすべてが終わってしまう。

こんな楽しいくて気持ちいいこと、まだ終わらせたくはない。

「やっぱりアレを使うしかねえかー」
できれば使いたくはなかったが、時間がない。

この前注文し、届いたばかりの小包を開ける。
中にはビニールつつまられた錠剤と粉末。
怪しいルートから、なかなかにお高い値段で買った
秘密のアイテムだ。

ひとつは感度を高め、痛みも快感に変えてくれる、
いわゆる媚薬。

未開発の性感帯もヒラいちまうらしい。
なかなか強いやつで、いきすぎに注意なんて
書いてあったが…本当かね？



もうひとつは意識が朦朧と…まあ夢見心地になるやつ。
ちよつと前後の記憶がとんじまうらしいが、
今回は好都合から良しだ。



どちらも依存性はない…らしい。
が、こつこついうものは使い過ぎたら体にはよくないだろう。

「まあ、ちよいちよい使うくらいなら大丈夫だろ」
錠剤を砕いて粉末状にした後、
もうひとつのクスリと混ぜ合わせる。
よくわからんが、一緒に使ったほうが効果的だろう。
べつに禁止とも書いてなかったしな。

「期待に応えてくれよ〜」
次に会ったときはこっそりコレを飲ませればいい。
そうすれば「使える」映像が撮れるはずだ。

それにしてもわざわざこんなものまでつかうことになるとは…
俺もだいぶあの女——育代を気に入っているらしい。



もっと犯してやりたくてしょうがない。
今は嫌がってキスすら許してくれないが
俺のちんぽを喜んで啜える女に変えてやりたい。



「楽しみだなあ〜…ふふっ」
想像を膨らませ、少し前に空になるまで射精したはずの
俺のチンポはまたガチガチに勃起していた。

『そろそろ…時間かあ……』
博司さんから連絡のあった時刻が近づく。
また…嫌な時間がはじまる。



「やあ、また会えましたね」

「……………どうも」

「おや？冷たいね。これからセックスするっていうのに」

「あくまで博司さんのためですから。」

「そうじゃなきゃこんなこと……」

「ふふ、そうだねえ。じゃあ今日も彼の特殊な趣味のために、
仲良くハメ撮りしなきゃね」

「……………」

「ふう〜…、今日もまた、不機嫌だねえ〜……」

不愛想な私の対応に、彼が溜息をつく。

「今日はあまり時間が無いんだが…
いつまでもこんな雰囲気じゃお互い辛い。
ちよつと座って雑談でもしないかな？」

「親交を深めるためにも。」

「はあ……」

「いつも会ってすぐにやってたからね…そこは謝ります。
奥さんみたいな美人とデキると思うと我慢できなくてね。
でも、いつまでも奥さんに嫌われているのは不本意なんだ。
できれば、もっと仲良くしたい。」

「……………」

私にはそんな気持ちはなかった。
でも、少しでも今日のセックスの時間を短くできるなら……
それどころかうまく話を長引かせれば、
しなくて済むかもしれない。



「……………わかりました。」

「じゃあそちらに座って待っていてください」

「あつ、おかまいなく」

「一応、お客様ですから」

少しでも時間を稼ごうと、コーヒーを淹れることにした。

『まあ、どいやらって話を長引かせ』

……

あっ♡♡♡ ｷﾀｯ♡♡♡

またおちんちんｷﾀあ♡♡♡

「どろけた顔してんなあ
そんなに俺のちんぽがイイか?」

「あっ♡♡♡ ひっ♡♡♡ イー♡♡♡

おしゅら...♡♡♡ きもせもらら...♡♡♡

すきら...♡♡♡ せーえきもらら...♡♡♡

「のおちんちんすきら♡♡♡」

「博司が聞いたら泣いちゃうぞ」

ｷﾀっ♡♡♡
おちんちん♡♡♡

あゝ♡♡♡
あゝ♡♡♡

イー♡♡♡

おちんちん
がすき♡♡♡

...なんでも「どろけたらぬらぬら?」
はやくキキキインの顔...
おながのおちんちんすきら♡♡♡

アッ♡♡♡

「ねえはやくっ...おちんちんが...」

「おっと、夫の話を今は浮気エッチだもんな」

「ねえ...♡♡♡ はやくっ♡♡♡ ♡♡♡

「ほんっと、俺のだからちんぽが好きだねえ、育代は...

...よ。誰か通ひたい」

たろ♡...♡♡♡♡♡♡♡♡♡

ほんなスクートの
うごめらん...んご

オセッ

オセッ

オセッ

オセッ

オセッ

オセッ



「うう……あえ……？」

次に気が付いたときはベッドの中だった。

「うん……は……おうち……？」

頭がボーッとして思考がまとまらない。

「わらし……なにを……」

あの人と会って……それから……
どうしたんだっけ……

「ん……ああ、起きたんだね」

「ひろし、さん……」

「いいから、今日はもう寝て」

隣で添い寝してくれている博司さんが
やさしく頭を撫でてくれる。
うれしい。

『そっか……今日はもう休んでいいんだ……』
よくわからないけど、すごく疲れていた。

「うん、おやすみなさい……」

やさしいきもちよさに包まれながら、意識を落とす。
なんだかよく覚えてないけど……

きょうは、きもちよかったなあ……

「それじゃ、今日もお疲れ様です」

「おう、お疲れさん」

いつもの居酒屋。

仕事終わりに軽い乾杯をし、雑談をはじめめる。

酔いも回ってきたころ、自然と例の件についての話になった。

「そういえばあの約束、あと一回ですよね」

「ん？ ああ、そうだね」

「約束どおりあんなにお金…」

「本当にありがとうございます！」

「はは、いやいや。うちのうちの」

今のところ、育代は特に変わった様子もない。

むしろ上司と会うことには全然乗り気じゃない様子が見て取れるくらいだ。

『変な心配はいらなかったな』

少しでも育代を疑った自分がバカみたいだ。

もうすぐ預金通帳の残高も元にもどる。

悩み解決が目前でお酒がおいしい。

「そういえば、この間はすまなかったね」

「この前…ああ！ 育代が飲みすぎちゃったことですか」
「そうそう」

「育代があんなになるのは初めてなんでびっくりしましたよ」

「いや、調子に乗ってついついお酒を勧めすぎてね。」

「良いヤツを買ったから、飲みながら話をね。」

「奥さん、無理してつきあってくれたんだ」

「ろれつが回らないくらい酔ってましたからね…あ、
そういえばお酒をのんだことすら忘れてましたよ。」

『お酒え…？そんなのんれない…』って」

「ははは、そりゃほんとに飲ませすぎだな」

「僕の大事な妻なんですから、無理させないでくださいよ？」

「いや、本当にすまなかった！」

「そういえば、育代と少しは仲良くなれましたか？」

「んー、ああ、まあ…ははは。」

「それがその…いや、言いたいんですけどねえ」

「あー…」

「育代は僕以外には他人行儀すぎるところがあるからなあ…」

「なん………。え……?」
「シヨックだろうが……マゾウなった。」

「あっ♡ あっ♡ んあああっ♡」

「まませちいらっしゅ♡ めめ……まっ♡……♡
あっーそれっ♡♡ イイっ♡」

スマホには妻の……育代のあられもない姿が映し出されていた。
結合部は遠目からでもわかるほどグチャグチャに濡れていた。
イヤホンからは甘く鼻にかかった声が、
2人の動きに合わせて聞こえてくる。

「っ♡……♡ たくしゃん……っ♡……♡」

「あああああっ♡♡♡♡♡」

「うそ…だ…こんな…」

育代が…僕以外の人と、エッチして……？
そんなことをしている様子なんて、全然なかった…と思う。
今朝だって…いつもと変わらない笑顔で……
それなのに——



「すっぴん…おっぱい…お…♡
おちんちん♡ やめなれ…♡♡♡」

一度出して終わったと思ったのだ。
甘えた声で次を催促する育代がそこだった。

「んん」

吐き戻さかっみあげてる。

「君の…うは、い、でも愛…く…らな、うんたよ、
妬けるくらい、うね。」

会ったときは君や家族の話ばかりしてましたよ。

ただ…奥さん、「ツチのほっはだいらぶ
欲求不満だったんじゃないか？」

「……………」

「このくらい年の女性は
性欲が強くなるからね」



「家族としての彼女は間違いなく幸せそうだが…
女性としての彼女は満足してないようだったね」

「不憫に思って私がスキマを満たしてあげたんだ。
私もまさかこうなるとは…すまないね。」

見ての通り、彼女はとても喜んでくれたわけだし、
恨まないでくれよ。」

「うー」

反射的に手が出つた。

「…あ…すみませ……………」

「ん……………や…、うすわ、何となくさあへね」

ついカッとなつてしまった僕に怒るでもなく、逆に慰めるように対応される。「唇が切れ少し血が出ている顔で諭され、暴力をふるった罪悪感が強くなる。」

「まあ、あれだ」
「気まずい沈黙を破って、再び話しはじめる。」

「私というのがもなんだが…寂しい思いをさせちゃいかんよ」
「私を責めるのはいい。しかし…奥さん責めちゃだめだぞ。彼女が君のような愛する夫がいるにも関わらず、私のような男とシてしまった気持ちを考えてあげてほしい。満たされていないかった辛さを、ね。」

その後、夫婦のありかた。

性生活の大事さについて一方的に話をされた…きがする。

でも、そんなことはほとんど頭に入らなかった。

帰宅して。
暗いままの自室で、僕はあの動画を見ていた。

「なんで…なんでだよ育代お…」
苦しい。悔しい。悲しい。
だというのに、映像の中の育代は
とてもいやらしくて…

もうずっと家族として見ていたのだ。

今見ている育代は「おんな」だった。

甘い声をあげて大きな声で喘ぐ彼女をみて、
僕のちんこは勃起、パンツが濡れてしまっていた。
妻が他の男に抱かれる動画。
もう何度繰り返し見ただろう。
いつしか僕は手を動かしていた。

「なんであんなやつと…!!」

なんでそんなに気持ちよさそうなんだ。

なんで僕が見たことないような顔をしてるんだ。

なんで「ムも使わずに「エッチしてるんだ。

なんで…中「と吐きわて…よるこんでるんだ。

「くそっ…!! 育代、育代っ…!!」

「くそおっ!! うっっっ!!」

(ドエツ、ドエツ、ドク、ドク、ドク)

涙に濡れながら情けなく射精したあの時は…
人生最悪の気分になった。

何度目かの射精をして、脱力する。

——元はといえば、僕が悪いんだ。

僕がお金のためにあの男と会わせたりしなければ……いや、もともと投資なんかには手をださなかったら……

自分ですべての原因を作っておきながら、育代を責めたら

「それこそ…」

最低の夫じゃないか……」

もし全てを育代が知ってしまったら、こんなひどい僕を許してくれるだろうか。

正直、自信がない。だから……

一時の気の迷いであることを願うしかない。

さすがに僕の頼みも無しに育代が自分から会いに行くほどあいつはハマっているとは……考えられない。絶対に。

あと一回、会わせさえすれば関係は切れる。そうしたらもう絶対に会わせない。

「全部僕のせいなんだから……」

僕が少しだけ我慢すればいいんだ。

我慢すれば……

そうすれば……すっししたら元どおりで……」



博司さんから彼と会うように言われるのも
今日で5度目。
またいつものようにセックスをするだけ……
と、思っていたのに……今日は違った。

「どうですか？」

「嘘……みたいです。正直、信じられない……
信じたくありません……けど」




いつものように乗り気でない私に対して、彼が見せてきたもの。
それは1本の動画だった。
明らかに隠し撮りしたもの。
映像だけで音声のない、少し遠目で、暗くて、不鮮明で。
でも、家具の配置や見慣れた後ろ姿でわかる。
映っているのは博司さんだった。

博司さんが自室で……オナニーをしている動画。
そして画面の中の博司さんが見ているのは――

元々、『そういうこと』だと納得したからこそ、仕方なくこの人に抱かれていたけれど。実際に映像として見せられると……ものすごくショックだった。

『本当に……そういう趣味、だったんだ……』
博司さんに限ってそんなことはない、そう思っていた。でもそれは……私の勝手な思い込みだったのかもしれない。

「大丈夫ですか？」
「う……はい、大丈夫……です。あは……すみません……」
そう言いつつも、抑えられなかった涙がこぼれ落ちる。



「今後のことを考えて、実際に彼の様子を見たほうが奥さんもふつきれて、気が楽になると思いますよ、悪いとは思いつつも録画したんですが……。」
申し訳ない。余計な気遣いだったかな？」
「ス……ッ……っ……っ……っ……」

「夢中で手を動かして…あ、また出したみたいですね。もう何度目かな？ 彼はかなりお気に入りなのでしょうね。」
後ろ姿で表情は確認できないけれど、確かに彼の言う通りに見える。
「私がデタラメを言っていたわけではないと、納得してもらえましたか？」
「ええ……そう、なんですね」

彼の問いかけに答える度、心の中でなにか支えのようなものが崩れていく感じがした。博司さんが止めてくれる、助けてくれると思っていたものが――



『うはは、こりゃあ相当効いてるな』

うなだれている育代の様子を見て内心ほくそえむ。

『こちらの望み通りの行動をしてくれたからな。』

本当に素直で良い部下だよ。ありがとう、博司くん』

『さて…もう一步追い込むか、どうするか。』

さすがにやりすぎか…?』

今日見せた、夫の性癖の『真実』のほかにある秘密。

金を肩代わりした話を、金欲しさに妻を売ったようにいい感じにアレンジして伝えれば——

『今の精神状態だと信じちゃうだろうなあ。』

そうしたら…?どうなっちゃうんだろうなあ、

ふふ、ふふふふふふ』

「奥さん、実は彼のことでもうひとつ………」

「ひじょーに、言いたいことなんです………」

「悲しむあなたを見て、これ以上隠しておくことは私の良心が許さないの——」

やっぱり隠し事はよくないだろう?..

「いいんですか？ 辛かったらもうやめるように博司くん…」

「いえ…もういいんです」

自嘲気味に笑いながら答える。

「そうかい？」

「マ…」でやめたら博司さんも残念がるだろうし…

お金を払わせてしまったあなたにも悪いですし」

「それ…」

あはは…

これまでしてきた私の行動が無意味になってしまっ。ただ色々なものが傷ついただけに。

だったら

片足を持ち上げられ、挿入の体勢になる。アソコに彼のさきさきっぽが少しはといった状態。

身構えていると、彼の顔が目の前に迫ってきた。

「あ……」



「んんんっ！ふっっ…んんんっ！」

(グググググッ)

「んく、うっっ、ふああ、は…あ…ん、ちゅ」
キスをしたまま、ゆっくりと挿入がはじまる。

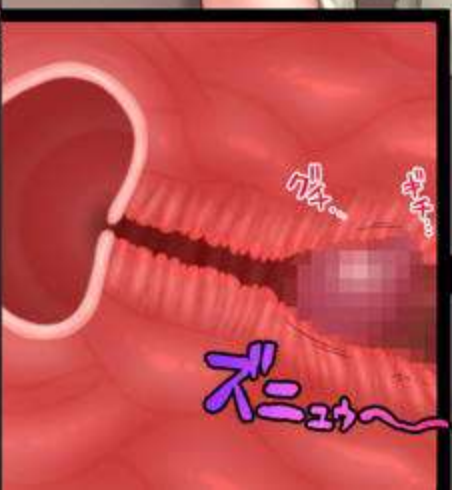


「今日も…いや、違うかな。これからずっと…
博司さんがもうやめてって言うってくれるまで、
頑張って我慢しないと……！」

アソコが、入口から順に限界まで広げられていき
下から突き上げるような形で奥まで挿入される。

「う、んん…？ あれ……っ？」

身構えていたおかげか、苦しさはいつもより少なく感じられた。



ズニョッ〜

ぐぐぐっ……

「今日は少し疲れたので早くから、
少し早く帰るからね」

(…うむむむ…うむむむ…)

「うむむ…うむむ…うむむ…うむむ…」

うむむむ…

うむむむ…



ゆっくりではあるが確実に入口から奥までの
抜き差しを繰り返してくる。

動きにあわせて膣内全体が大きなおちんちんの形に
変形しながら擦りあげられる。

いつもならペースアップするはずのピストンだけど、
今日は同じペースが長い時間続けていた。

「くぐぐぐ……んっ♡はっ、はあっ」

『…やっぱり、なんか、あ♡おか、しら……?』
今までは少し違う…
おちんちんの圧迫感や苦しさと同じくらい、
痺れるようなムズムズするような
感覚が生まれ腰を震わせる。

たん♡
たん♡

一度その感覚を自覚した後は、
どんどんそちらに意識が向いてしまう。

「なんで…あっ♡ううう…はっはっ…はあ…
ちよつと…まって、わたし…今日は、なんだか…
くうっ♡だめ、お願い、します…とまって…っ」

片足立ちの不安定な体勢で、自分の意志とは無関係に
下腹部が小さく跳ね、呼吸が乱れる。
ときどき、高く鼻にかかった声が漏れてしまう。



「ふふ、今日の奥さんはいつも以上に
かわいらしいですね」
「なに…言ってるんですか…あっ♡
ん、ちゅっ…あ…んくっ…」



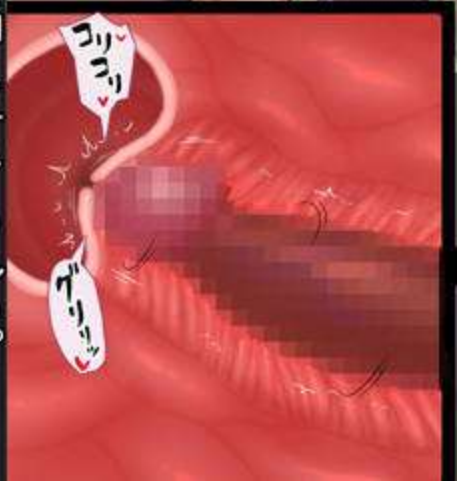
反論する口を塞ぐようにキスされ、腰を押し付けられる。
そしてそのまま円を描くような腰の動きに変えてくる。

「んんんっ…んんっ♡…ぶあっ…あっ…
そのぐりぐりするの…だめ、です…っ」

(ニチャ…ヌチユ…)

前後に摩擦する刺激から、
かき回しほぐすような刺激に変わる。
同時に、アソコの入口にある敏感な場所も
圧迫され強く刺激される。

「あっ…ダメ、いま、そこ…っまんじや…
あっ、あっ!!…ふっ、くっんんんっ♡」



「まっつて…う、わたし、あんっ♡なんで…っ♡」

『きもちよく…なってるの…っ♡』

慣れてきただけとは思えないくらい、違う。

これまで大きすぎて苦痛だったおちんちんなのに別のものに変わったみたいだった。



「奥さんのかわいい声を聞いていたらそろそろ…出したくなってきたよ」

戸惑っていると、再びピストンの動きに変わる。

さっきまでと違い、射精を目指して腰をうちつけてくる。

「あっ！ あっあっ、あっ♡ そんな、うごいちゃ…っ♡
だめ、だめ…ですっ…♡♡」

挿れられるときに抗げられるのも、奥までいれられてお腹の中…

子宮がもちあがるほど突かれるのも、抜かれるときに膣内が一緒に引きずり出されそうになる感覚も…

『なんか…うっ♡ しびれて…くふう…ん♡
声、でちゃ…っ♡』

「やあ…♡とまって…う　なんか、へん…で…う♡」
「はあう、はあう…きもちよさそうな顔、してるね」
キスをした名残のよだれを引きながら息を荒げる私に、
耳元で言葉を投げかけてくる

「やっと私を受け入れてくれたのかな？」
「え…う」



たしかに今日、私の中で何かをあきらめてしまった…
博司さんのために、この人との関係を
続けていくと決めただけど…

『それだけで、こんなに変わるもの…なの？』

一突きごとに快感が増していく感じがする。
眠っていたものが目覚めたような…
知らない間に私のカラダが
作り変えられてしまったみたいな…

博司さんの秘密を知ってしまった直後に
こんなに乱れてしまうなんて…

『わたし、こんな…はしたない女じゃ…あ♡』



(ほんっほんっほんっほんっ！)

ほんっほんっほんっほんっ！

「はっ、あっ♡ あっー♡ ぶっあっ♡
嘘っ♡うそっ、うそっ………
こんなっ…だめですっ！♡ ダメえっ♡」

ほんっ！

ほんっ！

ほんっ！

ほんっ！

ほんっ！

あーっ♡

あーっ♡

あーっ♡

ダメさ♡

あーっ♡
あーっ♡
あーっ♡
あーっ♡

ほんっ！

ほんっ！

おちんちんを激しく出し入れされ、
つながっているとそこから液体が飛び散る。

グチュグチュと卑猥な水音が私のアソコから
鳴りつづける中、腰が芯から震えてしまうような
快感の波が全身に広がっていく。

「だめ、だめっだめえっ♡ あっあっ♡
いや、いやあっ！！ んっ、はあっ、ああああっ♡」
「くっ……！ 俺も……！」

「ドゥーン!! ドゥーン! ドゥウウーッ!!」

「あ、あああ♡ ああああ♡
あああああああああ!!♡♡♡♡」

奥に熱いものが注がれた瞬間、
溜まっていた快感がはじけた。

ぐんぐん……



目の前がくらみ、大きな快感が全身を痺れさせる。
ガクガクと足が震えバランスが崩れるが、挿入されている
彼のおちんちんと、押しつけられた壁によって支えられた。

「ああ、ああああ……♡ はあ、ああああ♡♡♡」
「うそで……あたし…いつちゃ、つた……の?」

「ぶっ……はははははっ。」

「はじめて一緒にイけましたねえ、奥さん」
「う……あう……」

激しくイってしまったことを指摘され、
たまらない恥ずかしさがこみあげる。

「一緒に……なんて、ん……♡ 博司さんとだって……
ふっ♡ほとんど、ない……の……」

絶頂の余韻でまだ痙攣する体を支えるためか
無意識に彼にしがみついていた。

「よう……ど」
「う……くあ……♡」

ズレ……



長く激しい射精を終えたおちんちんが抜かれ、
久しぶりにアソコから挿入感がなくなる。

（ぐわん……ポトツ、ポトツ）

膣内に出された大量の精液が、股間や太ももを
ドロドロに汚しながら床に溜まっていった。

「今日の奥さんは今までで一番素敵でしたよ。
これからは心を開いて、お互い最高に気持ちいい
セックスをしていきましょっね」

その言葉に、私は何も返せなかった。

「では今日のところは帰ります」
珍しく、1回出しただけで今日は終わりとなった。
「いろいろお疲れでしょうから。ね」
『そう、ね……』
一人になっているいろいろ考えたい気分だった。

「ではまた。今度はこちらから連絡します」
「…わかりました」
「ああ、別に奥さんが呼んでくれてもいいですよ。
あなたのためなら、いつでも喜んで来ますから」
「……………私から連絡なんて、しませんよ」
「ははは、そりゃ残念だ」

(ガチャ…バタン)



「はあっ…………」
シャワーを浴び終え、緊張が弛む。
ソファに倒れこんで目をつむる。
『博司さん…………』
落ち着こうと最愛の人の名前を思い浮かべるが、
今日聞いてしまった話が思い出され、心がざわつく。

「ん…っ」
不意に腰がピクツと微かに跳ねる。

「わたし、なんで…………おかしいわ…………」
博司さん以外に初めてイカされたカラダは、
今もまだ落ち着かず…………
履き替えたはずのパンツは濡れてしまっていた。

この日、下腹部の疼きはしばらく収まらなかった。

「うっうっ……くそお……また、なんで……っ」

昨日、約束の最後の1回を果たした。
あの上司はしっかりと迅速にお金を振り込んでくれた。
その代わり……また、育代とのハメ撮り動画を渡された。

半脱ぎで立ったままセックスがはじまる。

まるでベッドにいくのも面倒かのように見えてしまった。
お互い、絡みつくようなキスをして。

下から突き上げられ、甘えた声色で喘ぎながら。

最後はしがみつき、

同時に……体を震わせていた。

そして僕は――

こうして自室で、涙を浮かべながら手を動かしていた。

「くそっ……くそっ……っ」

もう2度と育代を他の男に会わせるなんてしない……!!

僕が連絡しなければ、もう2人が会うこともないはずだ。

今もそのくらい育代を信じているし、

愛する気持ちは揺るがない。

でも……もう2回も最愛の妻が抱かれてしまった。

「育代が……育代が僕以外の男に……っ」

何故だろう……、そう思うと画面の中の育代が

妙にいやらしく見える。

それを見てちんこを固くしオナニーしている自分。

情けなさでいっぱいのはずなのに……

最近、性欲だけは昔の……

育代と付き合い始めた頃のように強くなっていた。

その後――

以前のような生活が帰ってきた。

育代は何も変わらない笑顔で僕に接している。まるであの動画の人は別人なんじゃないかと思ってしまうほどに、自然だ。

上司とも職場では以前と同じように接する。ただ、もう一緒にお酒を飲みに行く事はないだろう。それなりに長い付き合いだが…もう、無理だった。

あの動画に関しては…何もできないでいた。消すこともしていない。育代に見せて問い詰めることもしていない。もう終わったことなんだから、今更すべてを明かして、言い合って…喧嘩したって、いいことなんてない。

ただ、時々……見返してしまうのは……自分の失敗を忘れないため、だろうか。

先日、それなりに大きな仕事を任せられ忙しくなった。出張も増え、家族に会える時間が減ってしまった。これからはこんな状況が続きそうだ。でも、あの事を忘れるほど没頭できる仕事で、あの男と顔を合わせる機会も減る。その点については願ってもないことだった。

そんなある日、仕事を終え家に帰ると――

「!?」

「!! あっ、博司さん!?

「お、おかえりなさい♡」
「育代がリビングにいた。
全裸で。」

「なっ…なんでそんな恰好…?」

「えっと、ね。お風呂に長く入りすぎちゃって

身体がほてってるから涼しいのが気持ちよくて…
誰もいないし、いいかなって」

「ごめんなさい、だらしなかつたわね。

「あ、でももうちよつとだけ……」

「これ、飲み終わったら着替えるね。」

「いや、気にしなくていい、よ」

「慌ててカップを傾ける育代。」

「僕は、そんな育代の裸に目が

釘付けになっていた。」

普段、家族の優しい時間が流れるリビングで。
明るいライトの下、育代の
やわらかそうなカラダが動く。
もう長いこと、生では
見ることがなくなっていた裸。

今まで、何度も見たし、触った。
舐めたことだってある。
僕の妻なんだから当然だ。
でも家族としての愛が強くなって…
お風呂あがりの薄着をみても
そんな気分にはならなくなっていたのだ。

今、僕の股間は…
あの動画を見ている時のように、
大きく固くなっていた。

ズズズ...

ムムム

たぶっ♡

ちゅっ♡

♡♡♡



健康的な肉付きの尻が揺れる。
動画の中で、腰を打ち付けられて
いやらしく揺れていた尻。
挿入されて、突かれて…
僕以外の男に汚されていた尻。

『あんな奴にこのお尻が…!!』
怒りと嫉妬のような感情が溢れてくる。
背を向けている彼女に声もかけず、
僕は服を脱ぎ始めていた。



「……? 博司さん?」

脱衣の音に気付いたのか、育代が振り向く。

「え? ……あっ」

リラックスしきった育代の視線が顔から下へと移っていく。それが、勃起したちんこを見て驚きが変わる。



「え、えっ? ええーっ!? いきなりどうしたの!?!」

「育代……!」

「あっ! 博司さん……っ♡」

「育代、育代おっ!!」



テーブルに押し倒すように覆いかぶさる。こちらに突き出された形のいい尻を揉むと、その感触でさらに興奮が高まった。

「はあっ！はあっ！いいよな、育代っ！」
「落ち着いて…ね？」
「エッチしていいから焦らないで…♡」

「うあ…あああっ」
「あっ♡ ひろし、さ…っ♡ あんっ♡♡♡」

強引に挿入する。久しぶりに挿れた育代の中はものすごい気持ちよさだった。風呂上がりのせいか、熱く絡みついてくる上にしっとり濡れていた。



「あんっ、
あん、あんっ」

「もっと
強くして……」

「あん、
あん、あん」

ガタガタコソッ

2階で娘が寝ていることも忘れて、
思い切り腰を打ちつける。
テーブルがガタガタとこげるさいが
気にする余裕はなかった。

「はあ、はあっー！」

「あんっ、あん、あんっ♡」

「くっ、はあっー！ 育代っ、どうだ…!?!」

「あんっ♡ うんっ、もっと強くして…♡」

『あいつなんかより、
僕ほうがっー！育代を…っー！』

2人で気持ちよくなるために
必死に腰を振り出し入れする。

しかし異常に興奮しているせいか、
いつもより早く限界がきてしまうっ。



「くっ...くっ...よっ...!」

(「エッチ、エッチ...♡」)

「あ...!」

あいつこの行為に「上書き」するよっ♡♡
勢いよく中に出す。

「...落ち着いた?」

出したのに小さくならないちんぽで
つながったまま、問いかけられる。

「ごめん、ごめんよ。勝手にしちやっ...」

「ううん、謝らなくていいの...
っていうか、えっと...エッチしたいって

思ってくれたのは嬉しいから」

「育代...」

「私の裸を見て、興奮しちやっ...」

「ああ!した!」

「そっかあ...ふふっ、嬉しい♡」

「なあ、もう一回、いいか?」

「うん、いいよ...好きなだけ♡♡」



優しく微笑みながら
続きを催促する育代は
とてもいやらしくに見えた。
長い間セックスする気が
なかったのが嘘のように、したい。
若い頃の性欲が
復活したような気分だった。

結局この後、3回も射精して
勃たなくなるまでエッチした。

自分の妻としてしているだけなのに、
不思議と征服欲が満たされ
最っ高に気持ちいいエッチだった。

ガタガタ
ゴゴゴ
ッ



この日以来、育代と僕の関係は少し変わった。
家族のなかの「お父さん」「お母さん」の
僕たち夫婦だったのが、2人の間のやりとりは
エッチなものが混ざるようになった。
さすがに娘の前で、表には出せないが。
この変化は、2人にとって
良いものだったと思う。

今日は自撮り写真が送られてきた。
かわいい笑顔とやわらかそうな
おっぱいの対比がエッチだ。
「お仕事がんばってね、か」
遅くまでの仕事が続く僕に、
時々ちよつとエッチな写真を送ってくれる。
そんな時は元気になりすぎて、
職場のトイレでしてしまっただいももある。

「よーし!!」
早く帰って育代に会いたい。
そのためにも、気合を入れなおして
仕事を片付けよう!



こんな日もあった。

んっん〜



「ふんふん〜ん♪ んっんぶ〜♪」
「ただいまー」
「おかえりなさい、博可さん♡」
「今日もお仕事お疲れ様」
「あれ？ その恰好…!」

台所で洗い物をしている育代を見て、
すぐに違いに気づく。

カチャ

カチャ



「あははは……うんうんうん、今までは
恥ずかしくてできなかったんだけど、
どう、かしら。興奮する？」

あははは……
どうかしら？

裸エプロン。
新婚時代ですらしたことがなかった。
実は僕も一度してほしいとは思
っていたけど言えずにしまった。

たぶら

ふりっ♡

「うん……うん」
「あ……♡」

股間を膨らませる僕を見て、
満足そうな顔をしている。

そのあとは当然、することになった。
台所の隅に育代を押し倒してのエッチ。

「あぁっ♡ 素敵よ、博司さん…っ♡」

「育代っ！ 愛してる、育代！」

「あんっ、あんっ♡ どうっ？ 気持ちいいっ？」

「あぁっ！ 最高だよっ！ はぁっ！ はぁっ！！」

「ふっふっ、よかった…っ♡」

あんっ♡

あぁっ♡

んっ♡

覆いかぶさって本能のまま腰を振る。
キスをしながら、気持ちよくなるために
出し入れする。

「んっ、んっ、んっ♡ あんっ、あんっ♡
育代も気持ちよそっ♡
腰を合わせてくれる。」

はっはっ

ぱっ

はっはっ

はっはっ

はっはっ

はっはっ

「……」

「……」

(ジュッ、ピュルッ)

育代にじつと見つめられながら
たくさん射精する。

……

ジュッ

ジュッ、ジュッ
♡

ジュッ

ジュッ

ジュッ……

ジュッ

「はっ、はっ……」
「ふふっ……また襲われちゃった♡」
いたずらっぽい笑みを
浮かべているのがかわいい。

ジュッ

ちんこを抜くと、「アン」から精液が垂れてくる。

「また……こんないっぱい中に出しちゃったな」

「ん……そうね。でも、れくらくなら平気よ、おじや」

「まあ……できちやってもいいが」

「博司さんだったら、もう……♡」

おつかれや、おれ♡

きもちよかった？

興奮して自分勝手に動いたのに、冗談を言い合い優しく笑ってくれる。今日はもう一回くらいならイケそうな気分だった。

ちんこが、おれ♡

んっ♡

んっ

んっ

んっ



と、まあこんな感じで、僕たち夫婦は
また恋人のような情熱をとりもどした。

育代が他の男に抱かれてしまったことは辛かったけれど、
あのおかげで今のようない関係になれたと思えば、
これはこれで良かったと思う。

これからは育代を寂しげらせないように気を付けよう。
そう心に誓った。

そして。
充実した日々が過ぎていった。
夫婦生活は良好。
仕事もうまくいっていて、不満をあげるとするなら出張などで家を空けることが、以前よりもさらに多くなってしまったことくらいだ。

「あれ？」

出張先のホテルにいる僕に連絡が入る。
画面には、最近見る機会がなくなっていた名前が表示されていた。

『……なんだろう？ 会社で何かあったかな？』

もうあまり関わりたくない相手だったけれど、仕方なく確認する。

「やあ、久しぶりだね。
元気に働いているかな？」

突然ですまないが、君にも深く関係する話
なので連絡させてもらったよ。

話というのは育代に関してなんだが…
もう離れようと思われない程度には
私に対して愛着がわいてくれたと判断したので、
そろそろ教えてあげることにするよ

私と育代との関係について…ね」

「実は君には内緒ですっと彼女とは会い続けていたんだ。
例の約束が終わったあとも、ずっとね。」

育代がセックスレスについて相談してきたので
男の悦ばせ方を教えてあげたんだ。
自分のせいで君が抱いてくれないと思いつめて
性技を学ぶだなんて、できた嫁さんだ。

部下の愛妻を私の手でスケベな女に
変えていくという体験は、
本当に素晴らしかったよ。
君もその恩恵を受けていたはずだ。
わかるだろう?」



「ちんぽのしゃぶり方、おねだりの仕方、オスを興奮させるための言動…育代が知らなかったことを色々教えてあげたよ。キレイなものを自分の色に染めるのはやはり良い。」

君も喜んでくれるね？
いや、喜んでいたらね？
育代から聞いていますよ。


とはいえ開発する余地はまだある。
君が全然手を付けていないせいだぞ？
少しほぐすだけで心も体もドスケベになる
素質を持った女性を放っておくなんて
信じられんよ……。
いや、ごきは感謝するべきか」



「私のために育代の初体験をたくさん残しておいてくれて、本当にありがとう。」

調教を進める上での充実感や達成感、背徳感をくれて、本当にありがとう。」

育代は全然飽きない、いい女だから、これからもお互い大切にしていこうな。君はしっかり働いて家計を支えてくれ。私はそれ以外のケアを今まで通りして、君たち家族を支えてあげるよ。」



ああ、そういえば育代も
そろそろ気づくはずだが…
もうじきおめでたい事が
判明するはずだ。

どちらの種かはわからないが、
愛情をもって育ててあげてほしい。

君も愛している育代の血がつながって
いることは間違いないからね。
……無理矢理堕ろさせるような
かわいいそうなのとは、させないよな？

「もし離婚して私にゆずりてくれるのなら、慰謝料や手切れ金を払う用意はあるからいつでも言ってくれ。」

正直、今なら君よりも私の方が育代を愛し、愛されているとさえ思っているからね。いままでの話を聞いて愛が冷めたというなら、すぐに連絡をくれ。待つている。

ああそうだ、それと——
もし以前渡した動画のように、オナニーのおかずが欲しいというのであれば、撮っておいた画像や動画はたくさんあるから遠慮なく連絡してほしい。
今はまだ君の妻なのだから、独占はしないよ」



「おっと、
つい長くなっちゃったね。
そろそろ時間だから失礼するよ。
待たせちゃ悪い。」

「じゃあ、君は引き続き出張を
がんばってくれたまえ。
せっかく私が上に君を推薦したんだ。
会社の期待には応えてくれよう？」



今日も出張先のホテルで一人、
ある連絡を待つ。

「……………」
いつもの時間に届いた動画を
早速再生する。



「あっ！ もー、ちよつと待つてつて…
ンッ…んん…」
軽く咳ばらいをして話はじめる。

「博司さん、出張お疲れ様です。
今日は新しい下着をプレゼントしてもらった
から、博司さんにもお披露目するわね。
海外のランジェリーカタログを見て
買ったらしくて、私もまだ
着たことないタイプなのよ」

少しずつ上着がたくし上げられ
下着が見えてくる。

「……ズンと… 今の時点で
ちよつとエッチなやつだって
わかっちゃうかしらっ?」



「おちんちん勃ってきた?
博司さんもうっうの、
好きだといいな」

育代が話す通り、腰あたりまで
見える時点で明らかに
普通とは違う作りだった。
下着なのに、毛もアン「も
思っしやん眼すとこもいん。

「ジャジャーン♪」

「刺繍がとっても素敵だと思わない？」

「……」

画面の中では扇情的な姿をした
育代が楽しそうにしている。



「フリルも可愛くて、
おっぱいもきれいに
見えるようになってね——」

「おまんこのところはすぐ
ハメてもらえるように
オープンクロッチになっているの」

「ね、どうかしら？ 博司さんも
おちんちん挿れたくならない？」

「こちらに話しかけるように
言葉を続ける育代。

僕が見たこともないような
特殊な下着を身に着け、
下品な言葉を使っている。

「うしろはこんな感じ。

すっぴい食い込んでてエッチじゃない?」

「~~~~~」

「……あー! そっか、背中はちよつと

びっくりしちゃったかな?」

安心して♪それタトゥーシールだから」

「私はあんまりうしろの

好きじゃないんだけどね。」

うしろだと自分じゃよく見えないし。

でも彼が試してみたいって何度も言うから、

ちよつとつけてもらったの!♡」

「う……う……」

すっかり変わってしまった

僕の愛する清楚な妻の姿に、

張りつめたちんこから涙がこぼれる。

「もし博司さんもこの恰好の私と
やりたかったら、いつでも言っで♡」
「まだかー？今回はくれくらいでいいだろ。
むしろハメさせてよ」



「あ、そろそろ彼が
我慢できなくなっちゃったみたい。
それじゃ、今日もすっごいおちんぽで
いっぱいかされてくるわね♡」

「今回は本番の動画はおあずけだから
だから下着姿を見て想像しながら
おちんちんシ〇シ〇してね♡
愛してるわよ、博司さん♡」

「あ、ああ……ぐっ……んんん……」
(「フー・フーラシー」)

「今日は娘が友達の家にお泊りするの
私もラブホにお泊りでーすよ」

「一人で仕事してくねでらる博司やんは
今夜のおかずをプレゼントするわね」
♡



「今日はぶっかけ動画に初挑戦するの。博司ちゃんも一緒にいっしょにやっとな♡」



「はぁ...う...はぁ...」

「ちやーんと猫をなめて...のろのろのサーズン...
うんちが...♡♡」

「はぁっ…はぁ…はぁっ…はぁっ…」

「あ…あっ♡ひたあ♡♡」

「育代の舌に精液がかけられていく。つられて、僕の手の動きが早まる。」



「あつ…あつ…あ、ああつ」
(ポトポト、ポタポタッ)

「んんん…♡♡」
「今日のも濃すぎたよ…飲みよ〜♡…♡」



「マロシママロシママロシマ」

「マロシママロシマ」♡

「♡♡♡♡♡」



「よし、育代。録画止めてこのままやるぞ。股開け」

「ええっつ。今わたし目を開けられないのに……」

「俺が動いてやるから。ちんぽに集中できていいだろ」

「ん……まあ、それなら……」

「あ、博司さん。じゃあまたねっ♡」

おわり

ウラにつづく





























フワ
フワ

はん
はん

グチュ

グチュ

グチュ

はん

外に...

だめ!

!!



はー！

おっ

パン

パン

パン

パン

パン

パン

おっ...おっ...おっ

おっ...おっ...おっ

おっ





♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

はっはっ

はっはっ
はっはっ

はっはっ

はっはっ

はっはっ

はっはっ
はっはっ
はっはっ



はっはっ
はっはっ

はっはっ
はっはっ

はっはっ





ぷんぷん...

♡ みるみ♡

すっすっ...
+ ママママ...



シャワー...
...



おは...は...は...
...は...は...
...は...は...

おは...

おは...は...は...
...は...は...
...は...は...

おは...は...は...
...は...は...
...は...は...







んん...

んん...

んん...

んん...

んん...

んん...

んん...

んん...

んん...

んん...



.....

.....

ちんちん

ちんちん

ちんちん

ちんちん

ちんちん

びちやあ...





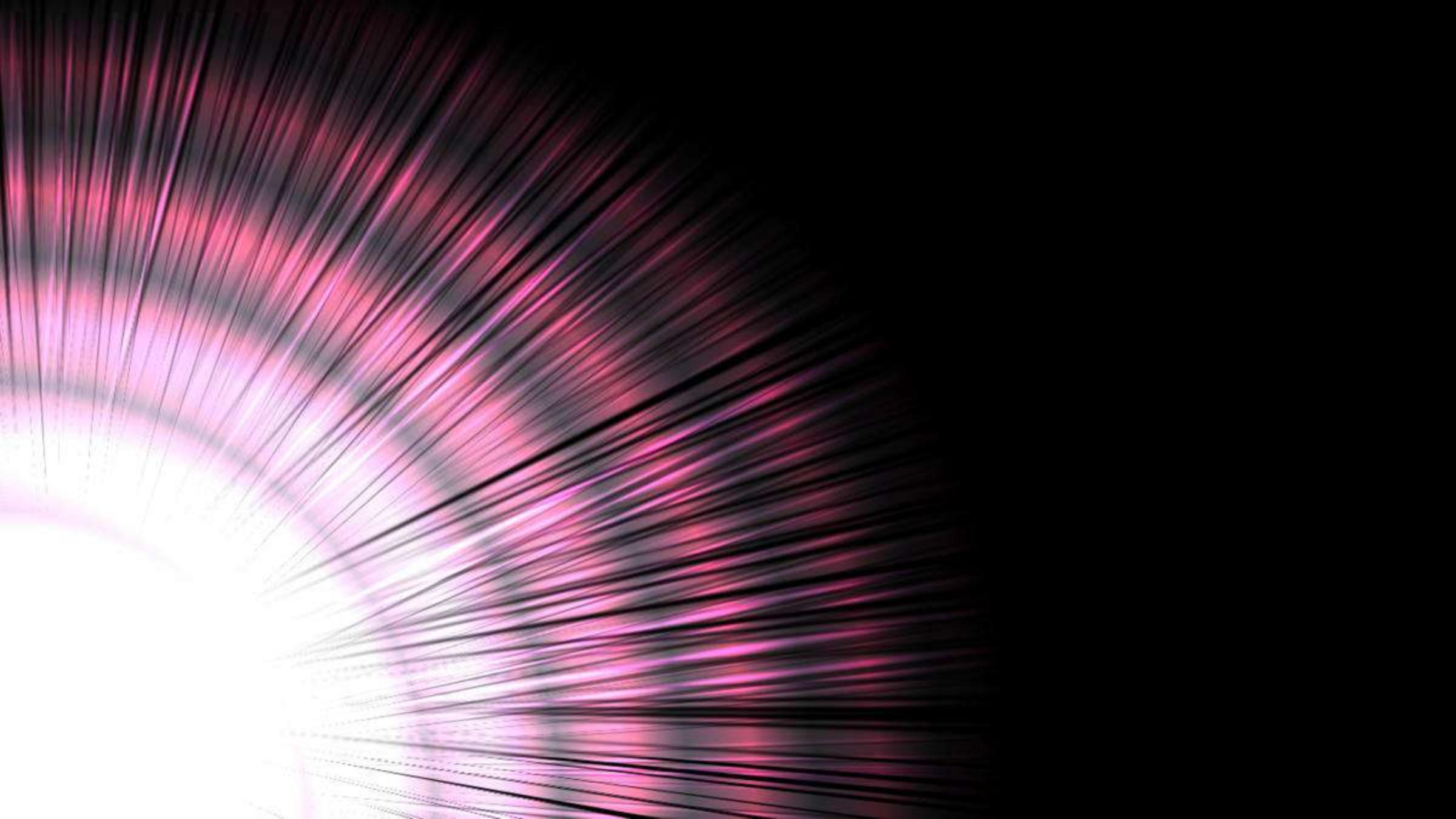


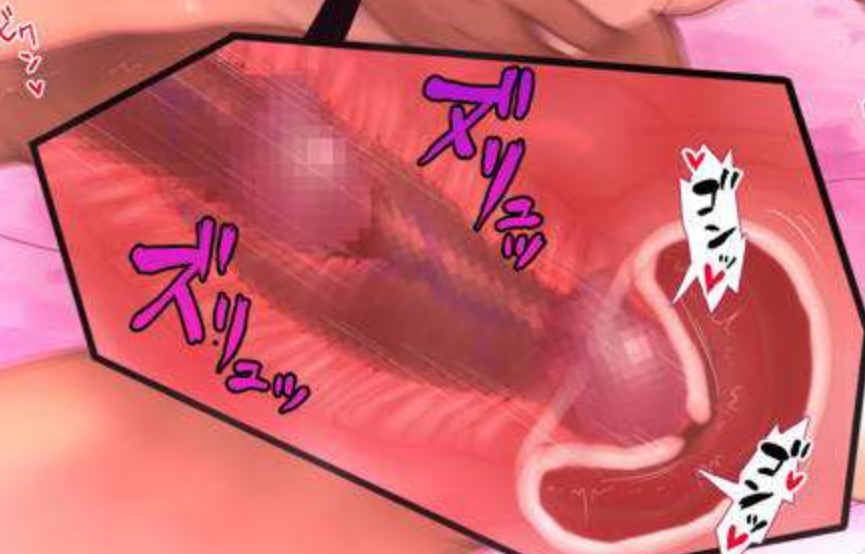












やだ やだ

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん

うん



気持ちいい...♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡



キタタタ...
おすすす...
おすすす...

おす...
おす...
おす...

イェ...
イェ...

おっキーン...
おすすす...
おすすす...

おす...
おす...

おす...
おす...

おす...
おす...

おす...
おす...
おす...

おす...
おす...



ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ



ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ
ニギニギニ

ニギニギニ
ニギニギニ



♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡



















あはは...

ちゅ...

ちゅ...























ハハハ...

ムム

たぶっ♡

♡♡♡♡♡

♡ちゅっ♡



お尻♡

お尻♡





ふふっ♡

エッチしていいから
落ち着いて…ね？

あっ♡

あんっ♡

ぐん…

むにゅ♡



もっと
強くして...♡

あん、
あん、

あゝ
ん
ん

ツ
コ
キ
タ
ガ





あんっ♡

あんっ♡

あんっ♡
あんっ♡
あんっ♡

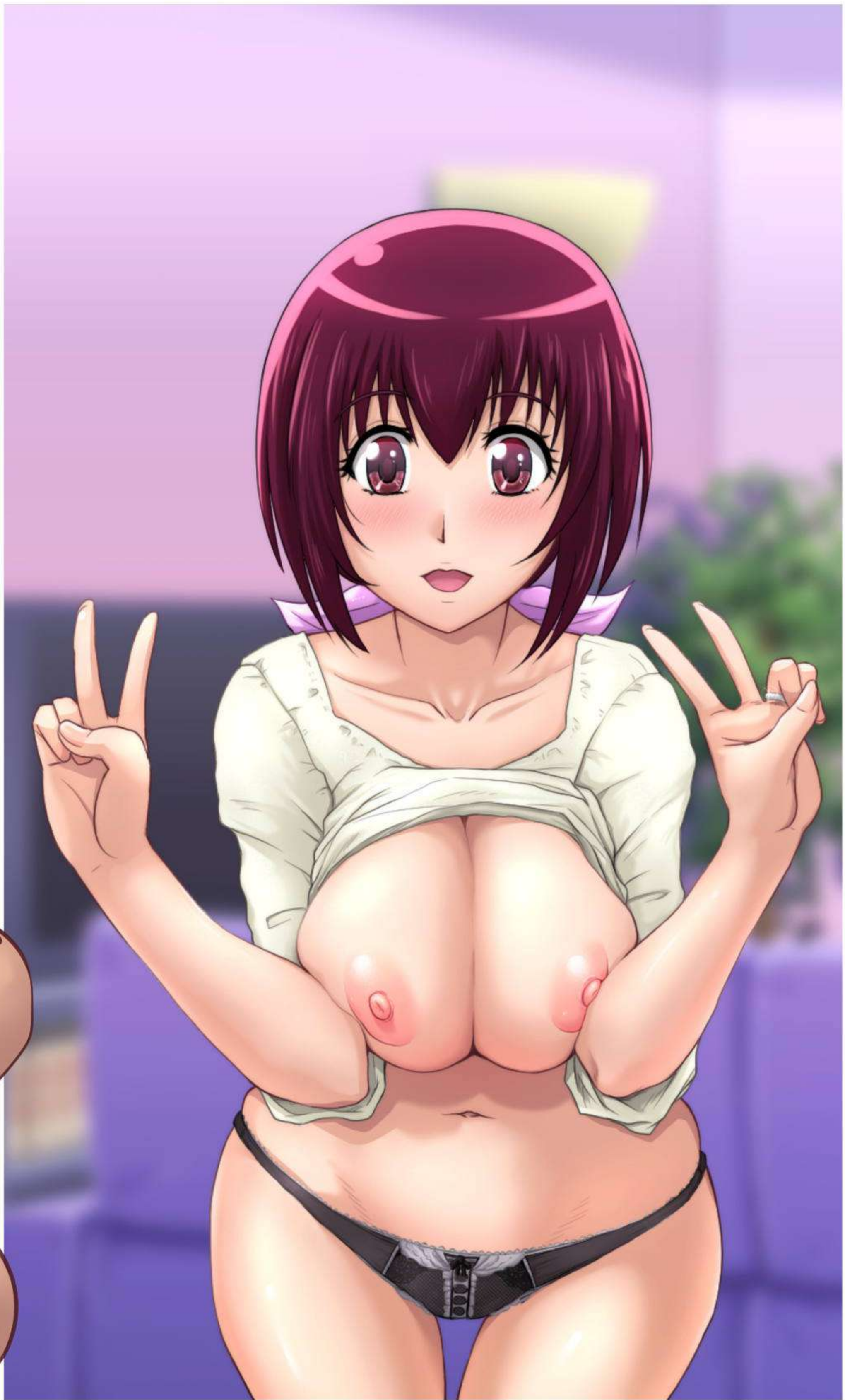
あんっ♡
あんっ♡

あんっ♡

あんっ♡

あんっ♡
あんっ♡
あんっ♡







んっん〜

カチャ

カチャ



あはは...
どっつかしゅん...

110237

110237



んっ♡

あっ♡

あっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡



.....

بنتي بنتي بنتي

بنتي بنتي بنتي

بنتي بنتي بنتي ♥

بنتي بنتي بنتي

بنتي بنتي بنتي

بنتي بنتي بنتي

بنتي بنتي بنتي



おっかなやも❤

キ、サ、タ、レ、カ、ッ、サ、レ、...

ちゅぽぽぽ❤

くっくっ

くっ

くっ

くっ





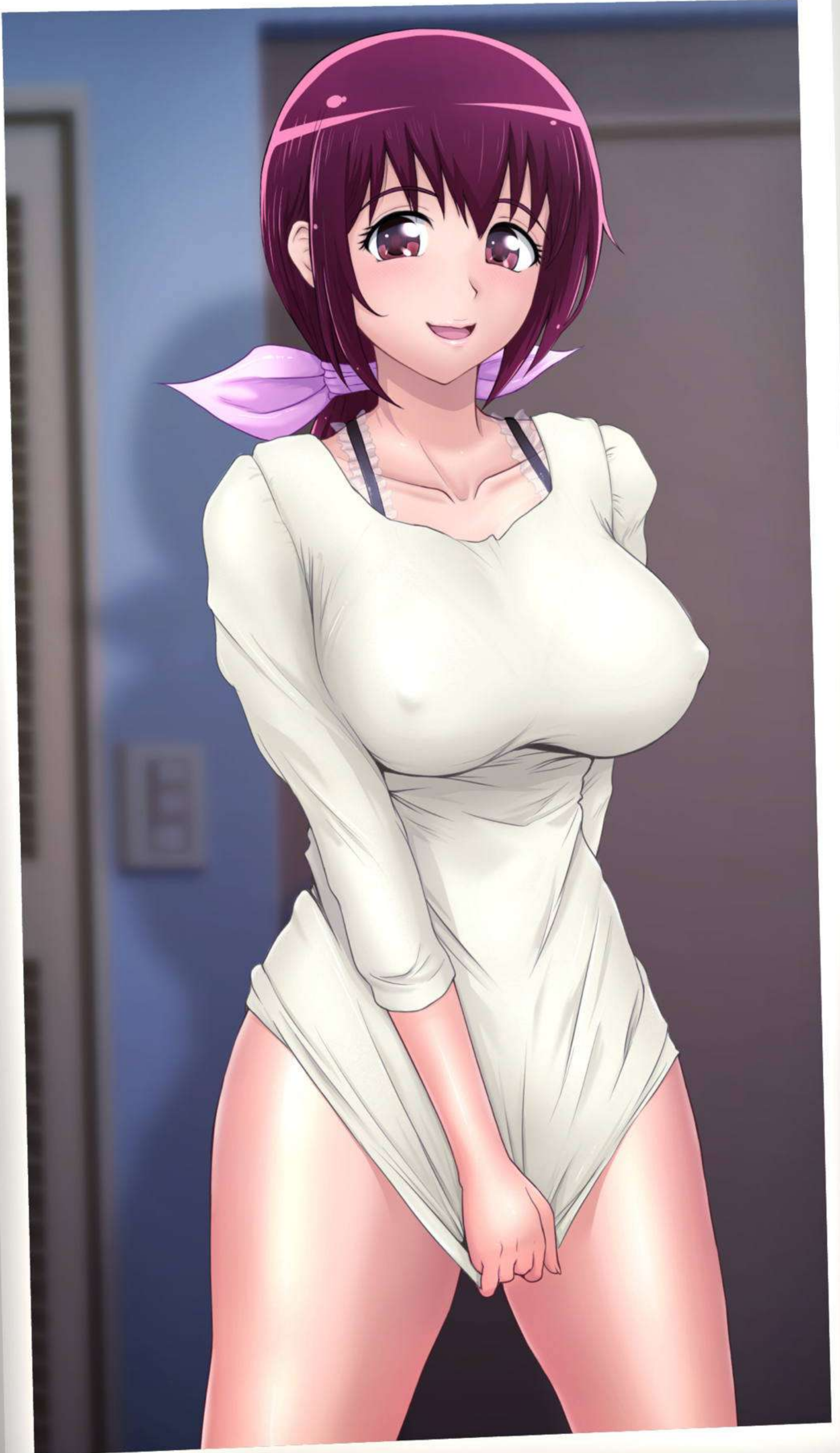




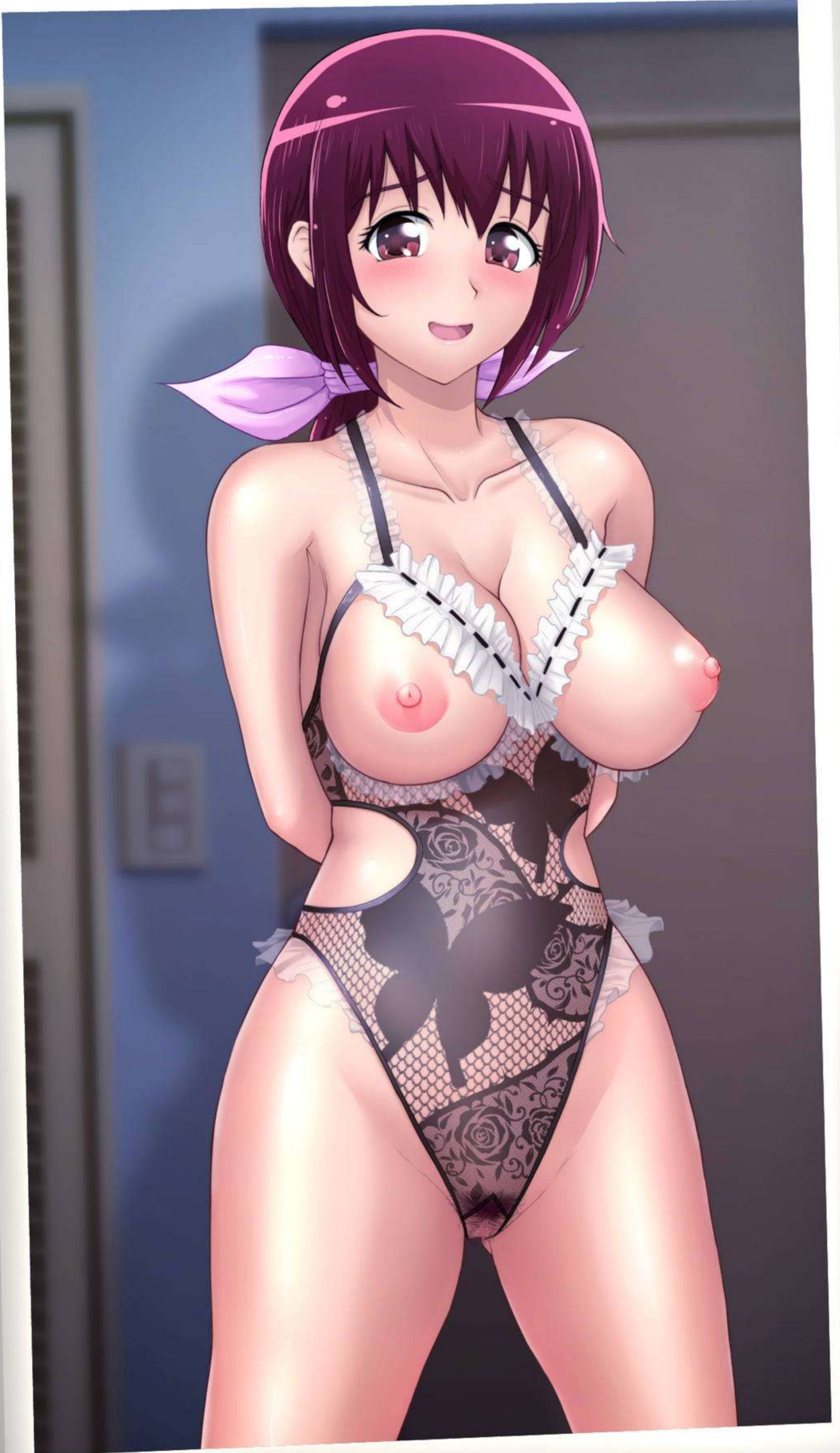


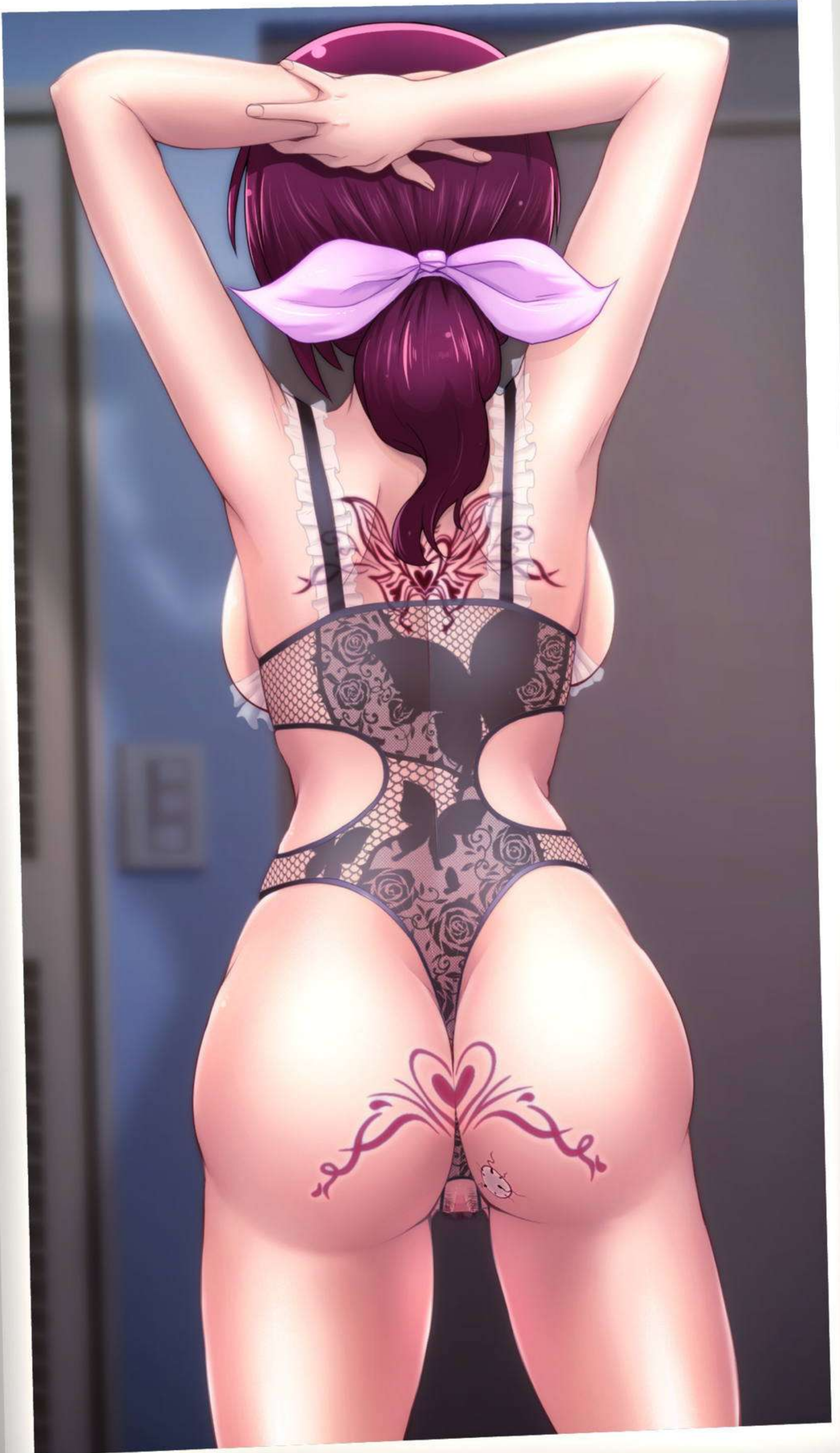


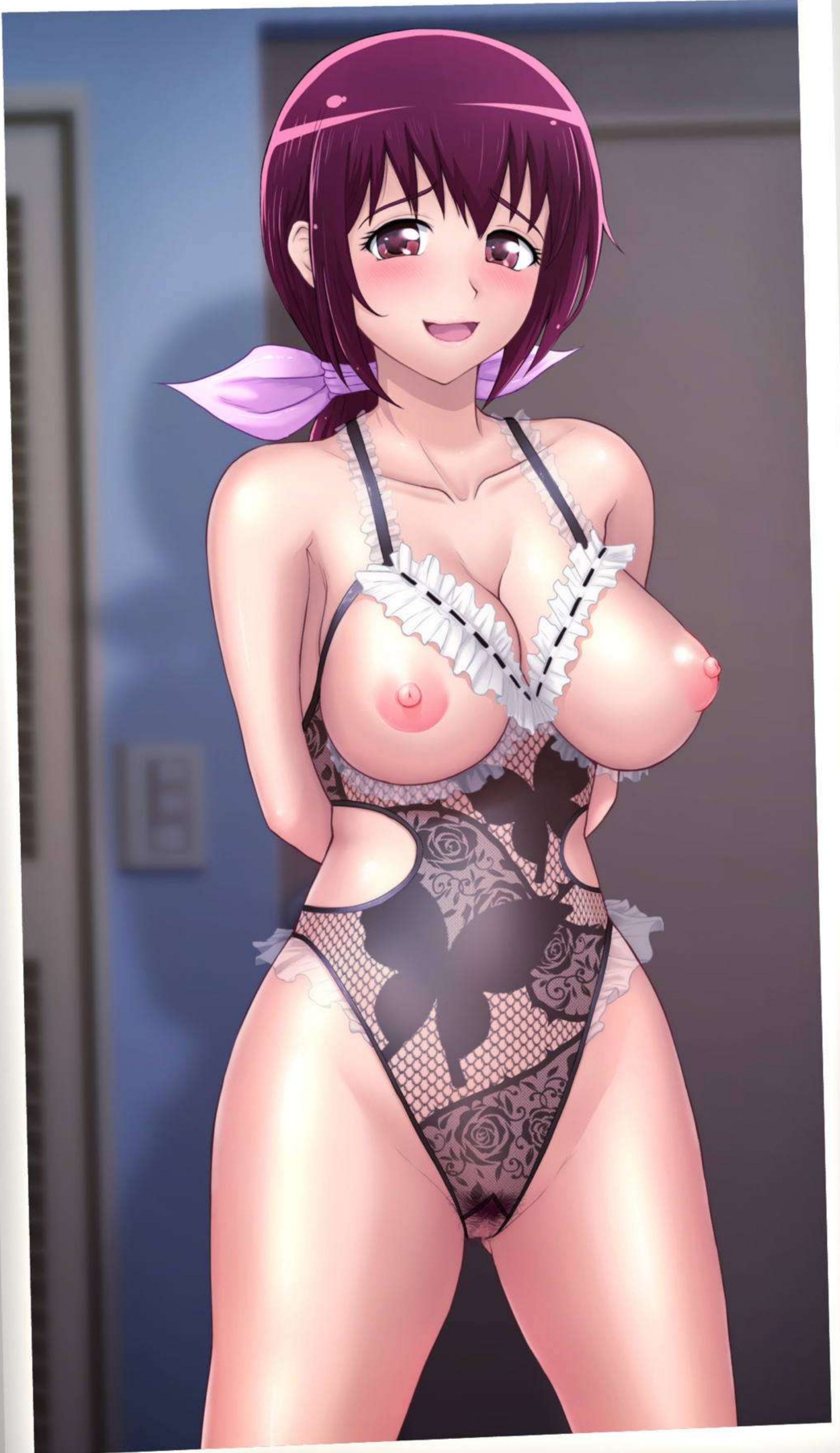




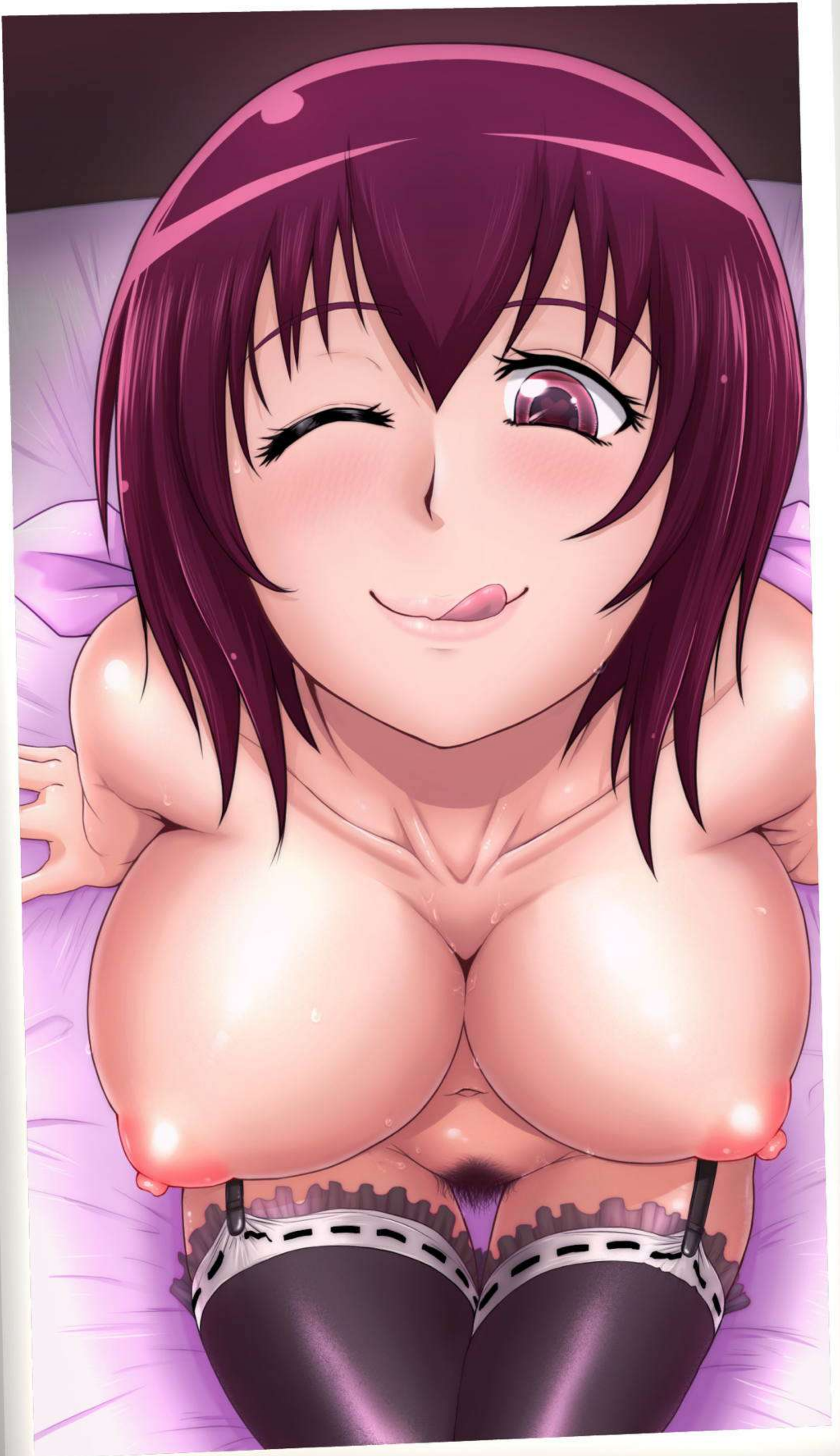






















おわり

ウラにつづく























































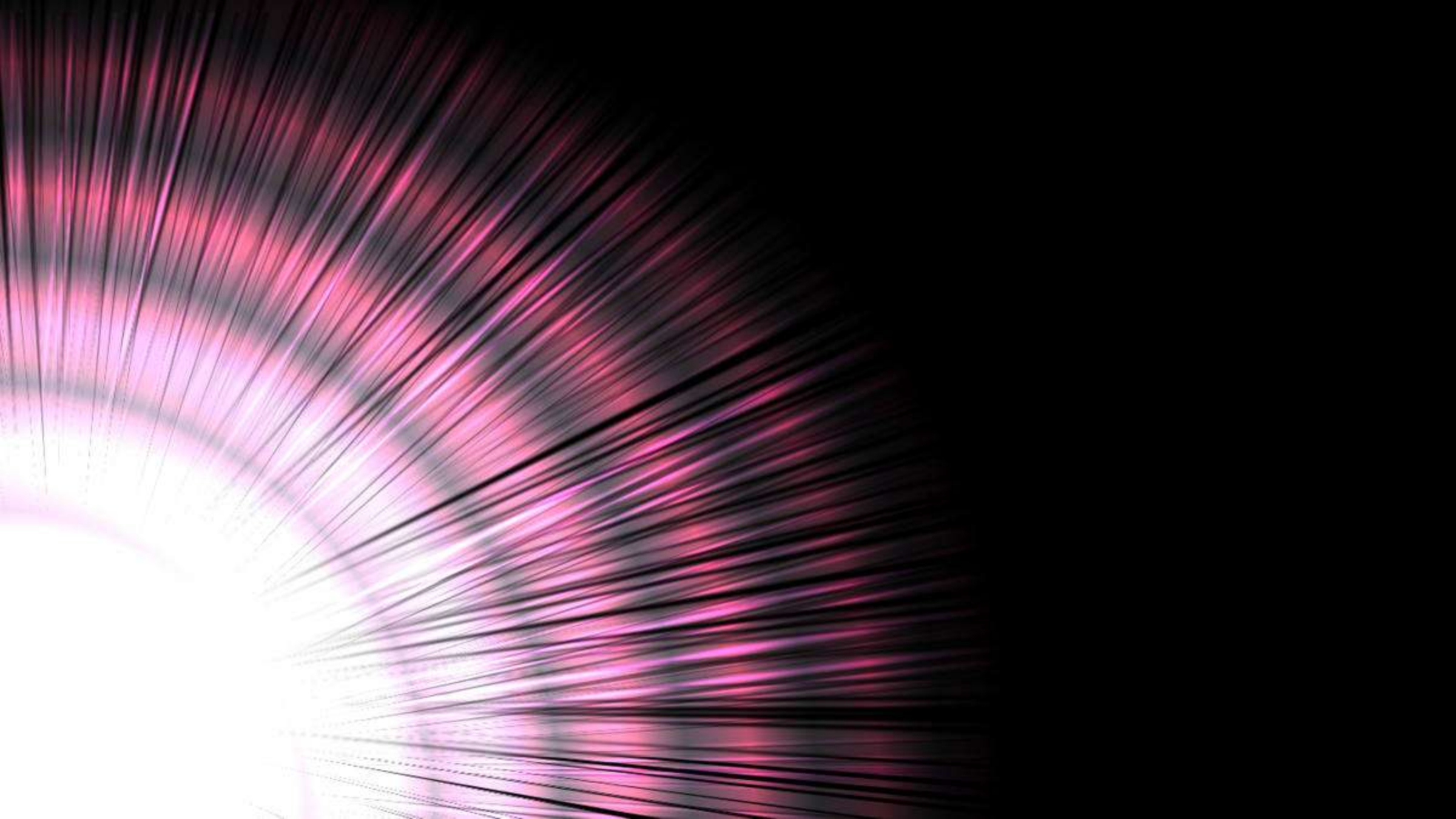








































































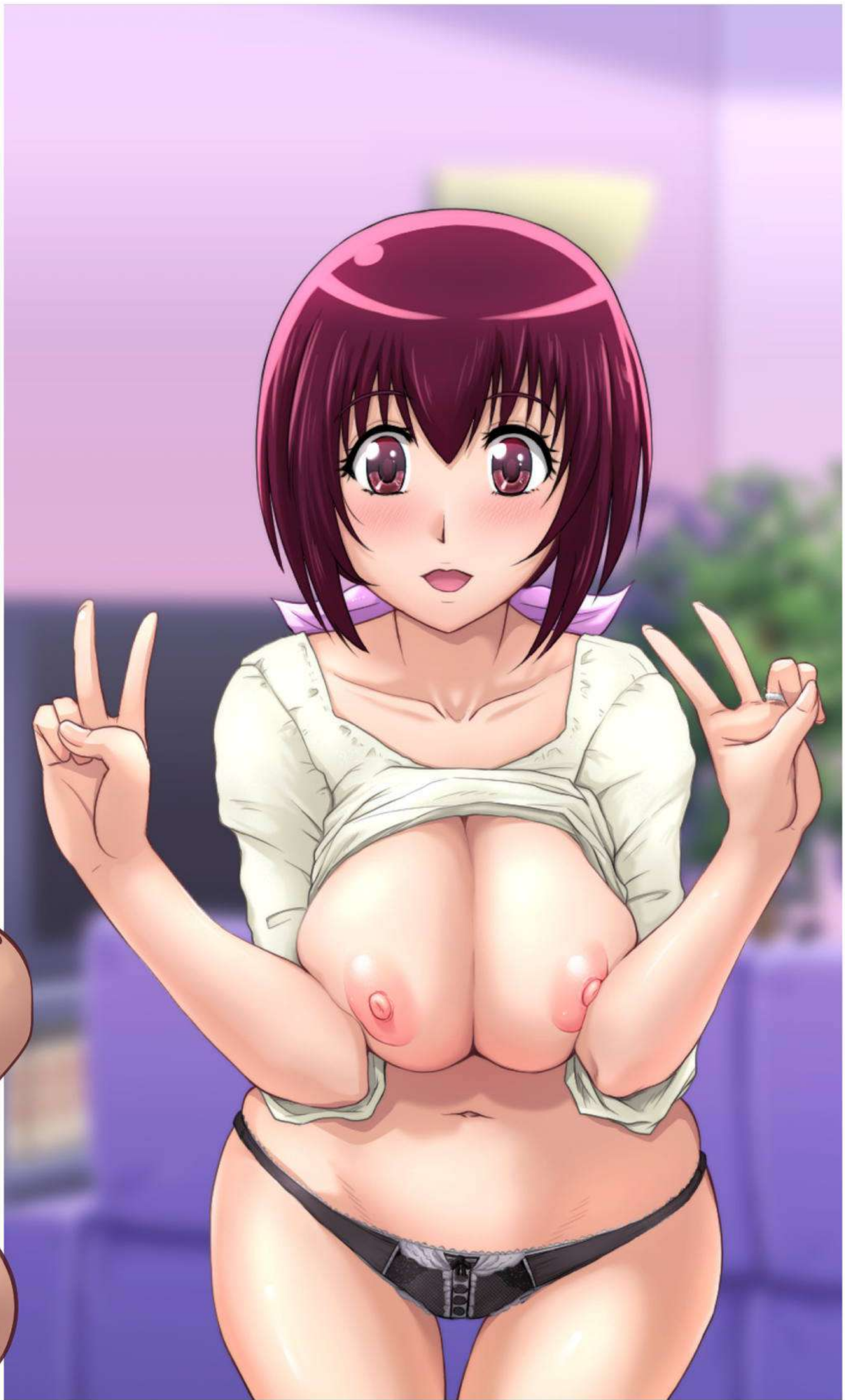


























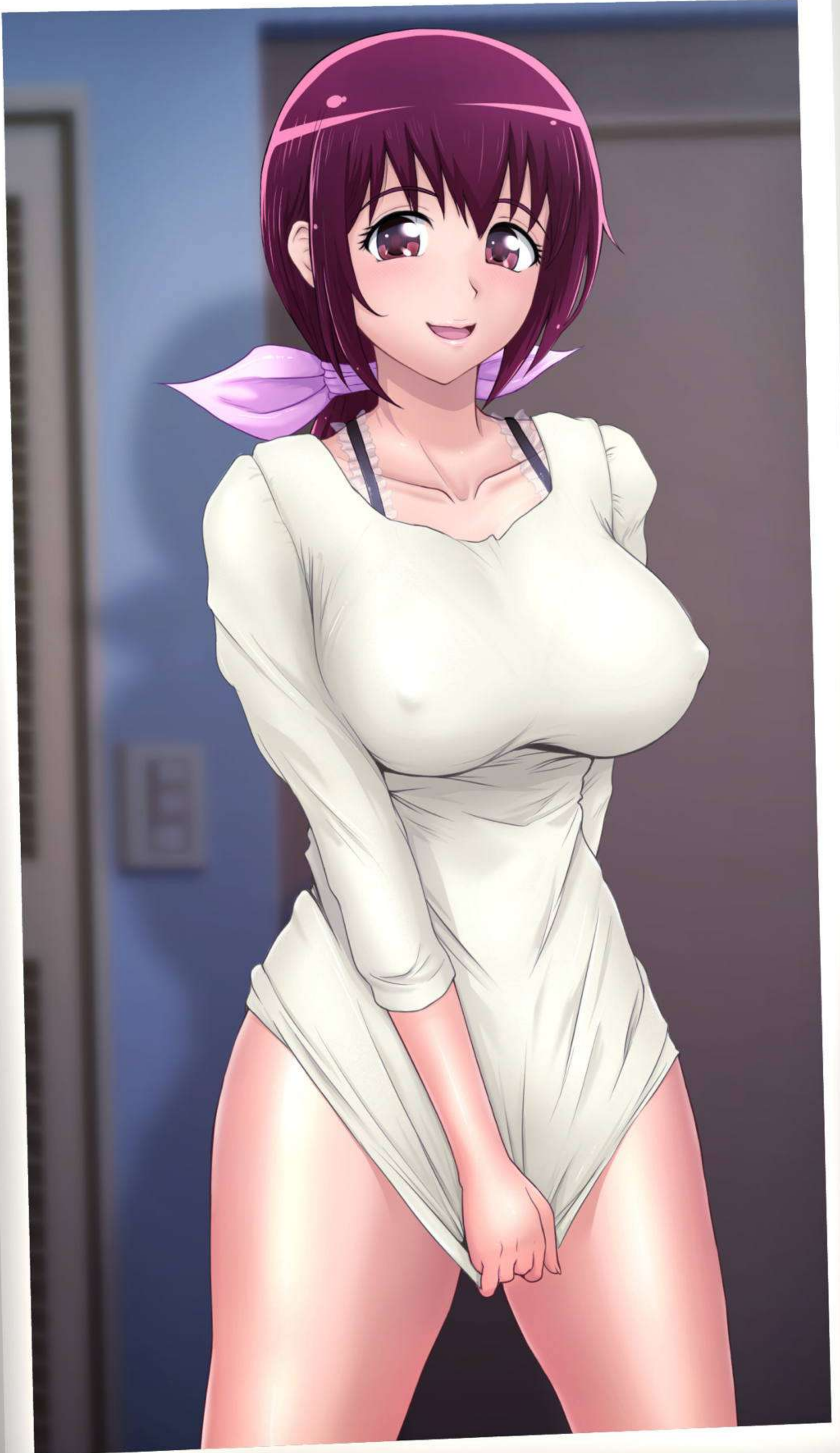




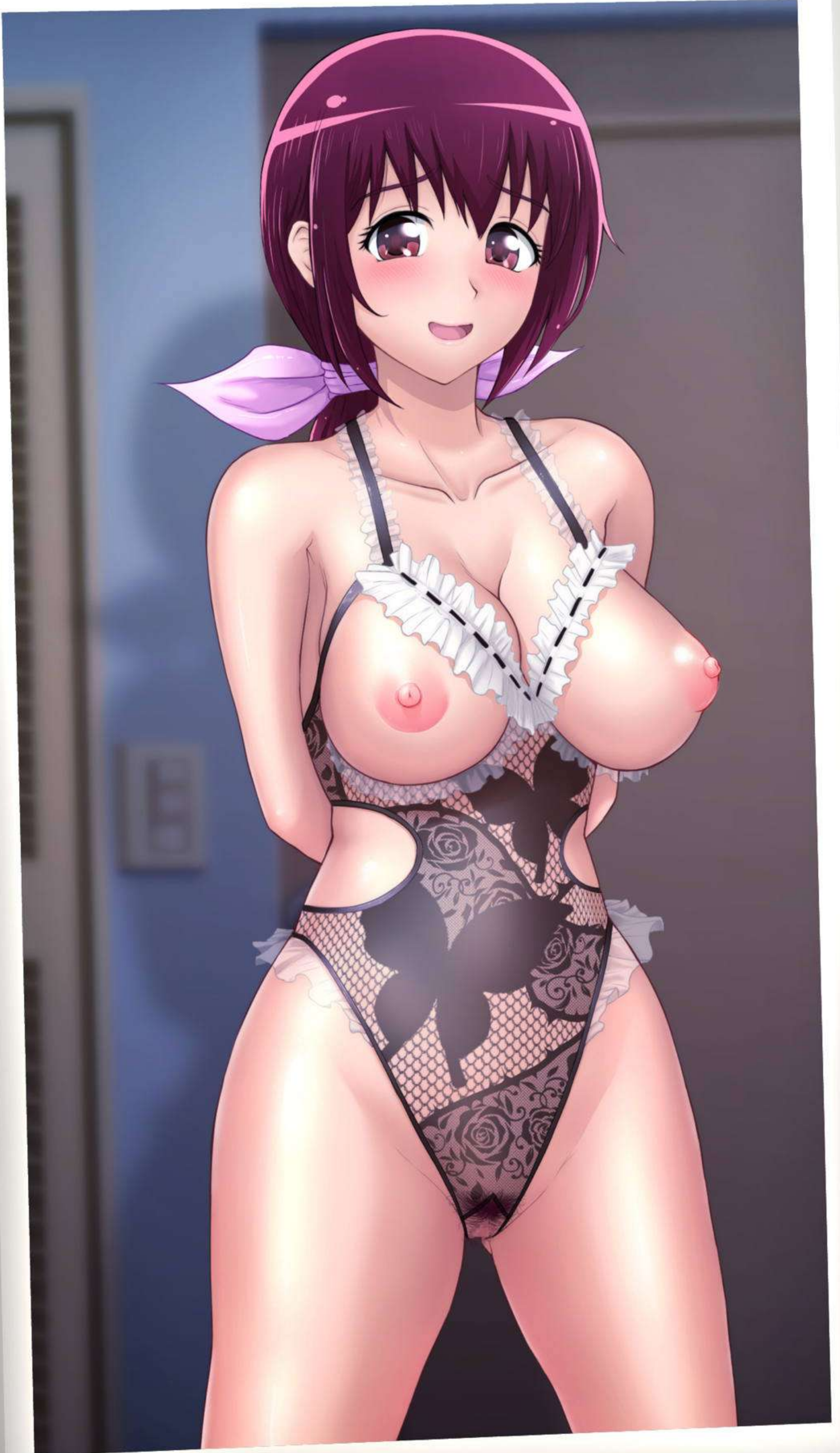


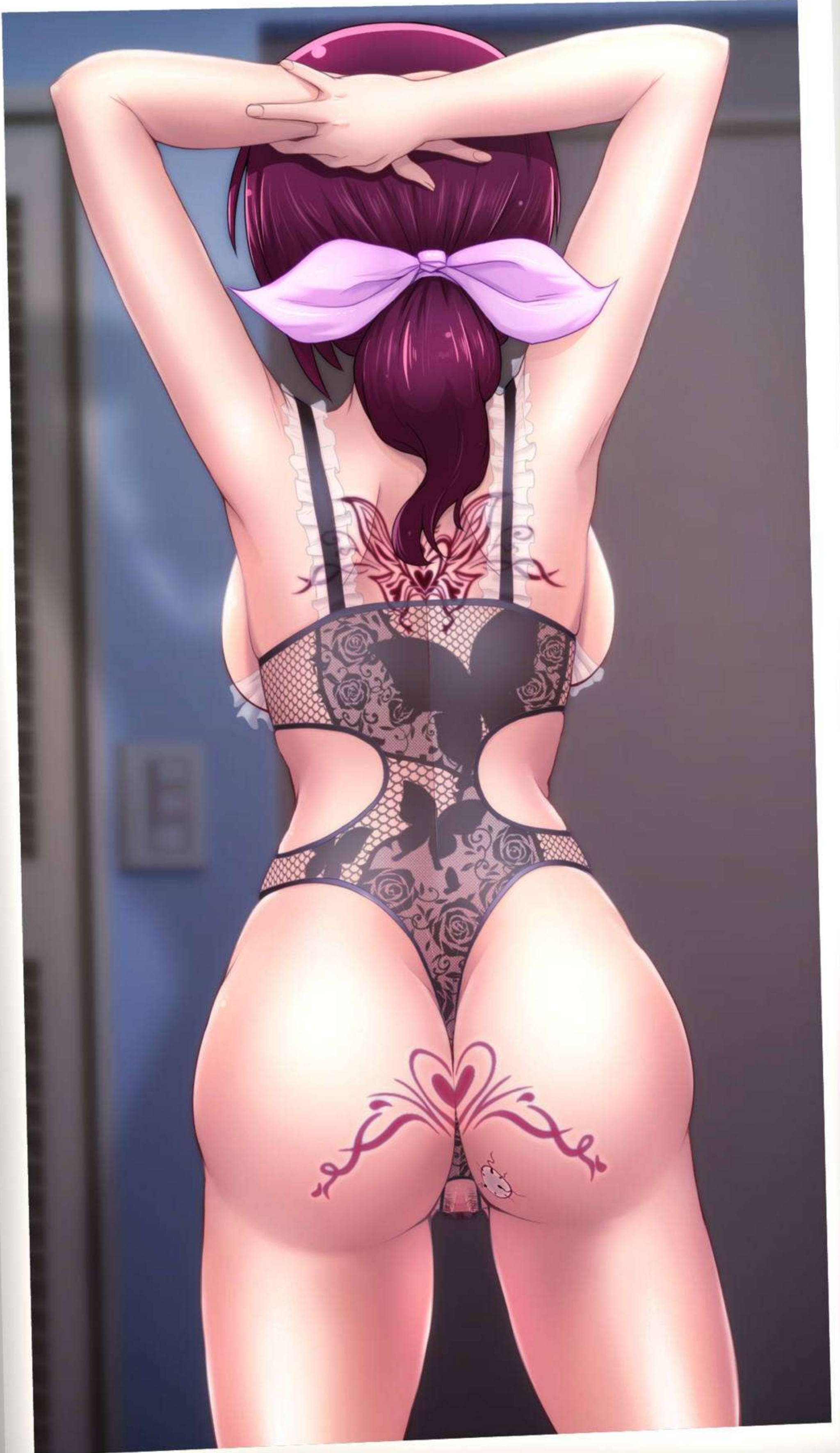


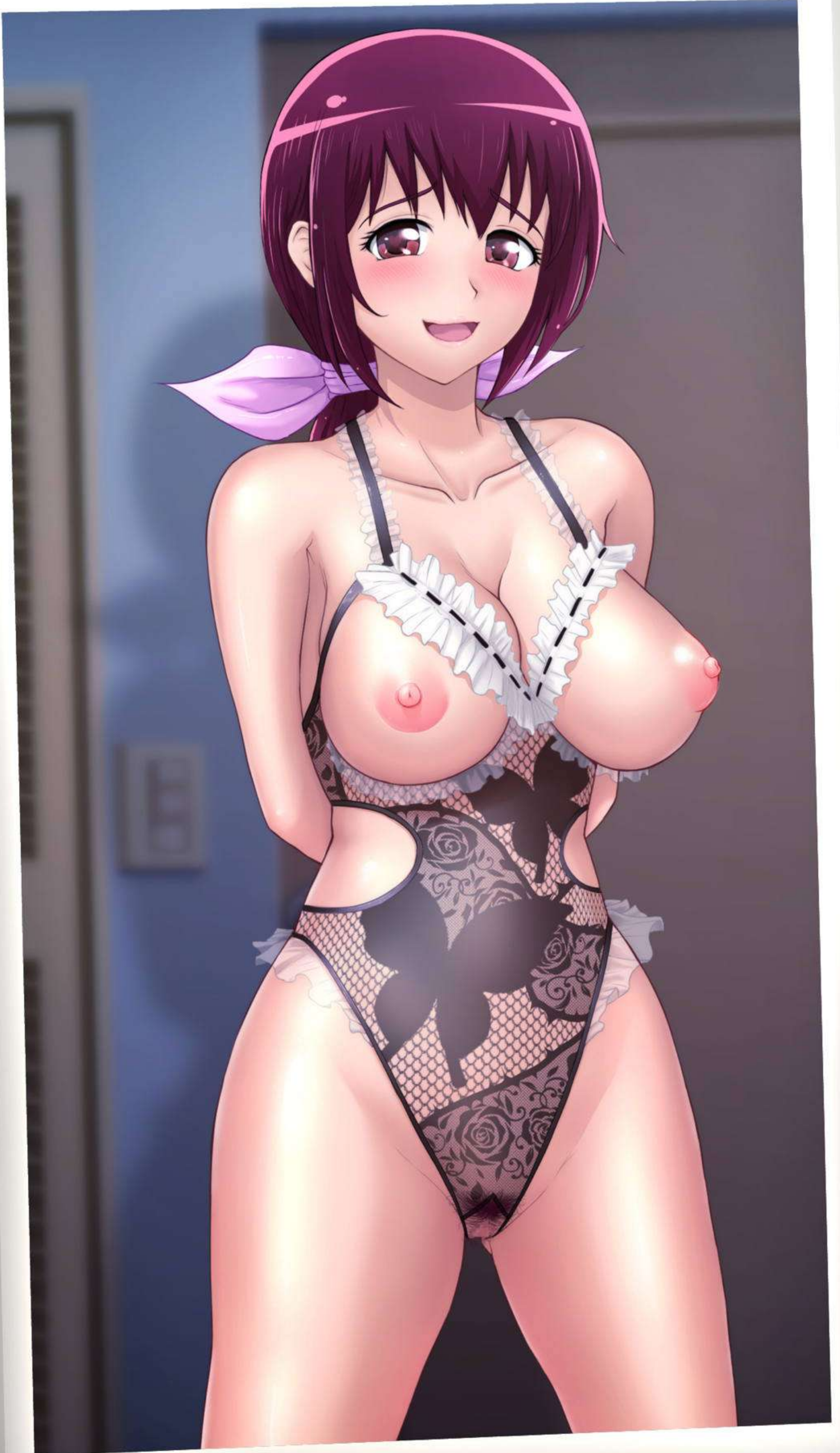


























おわり

ウラにつづく























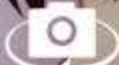


● REC





AUTO





初ハメ&中出し
成功!w

育代、経産婦
泣きながら旦那の名前

呼びまくリ。
興奮に朝までコース
でした♡



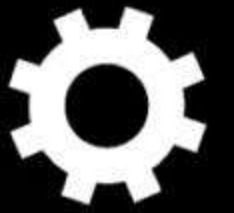


AUTO





AUTO











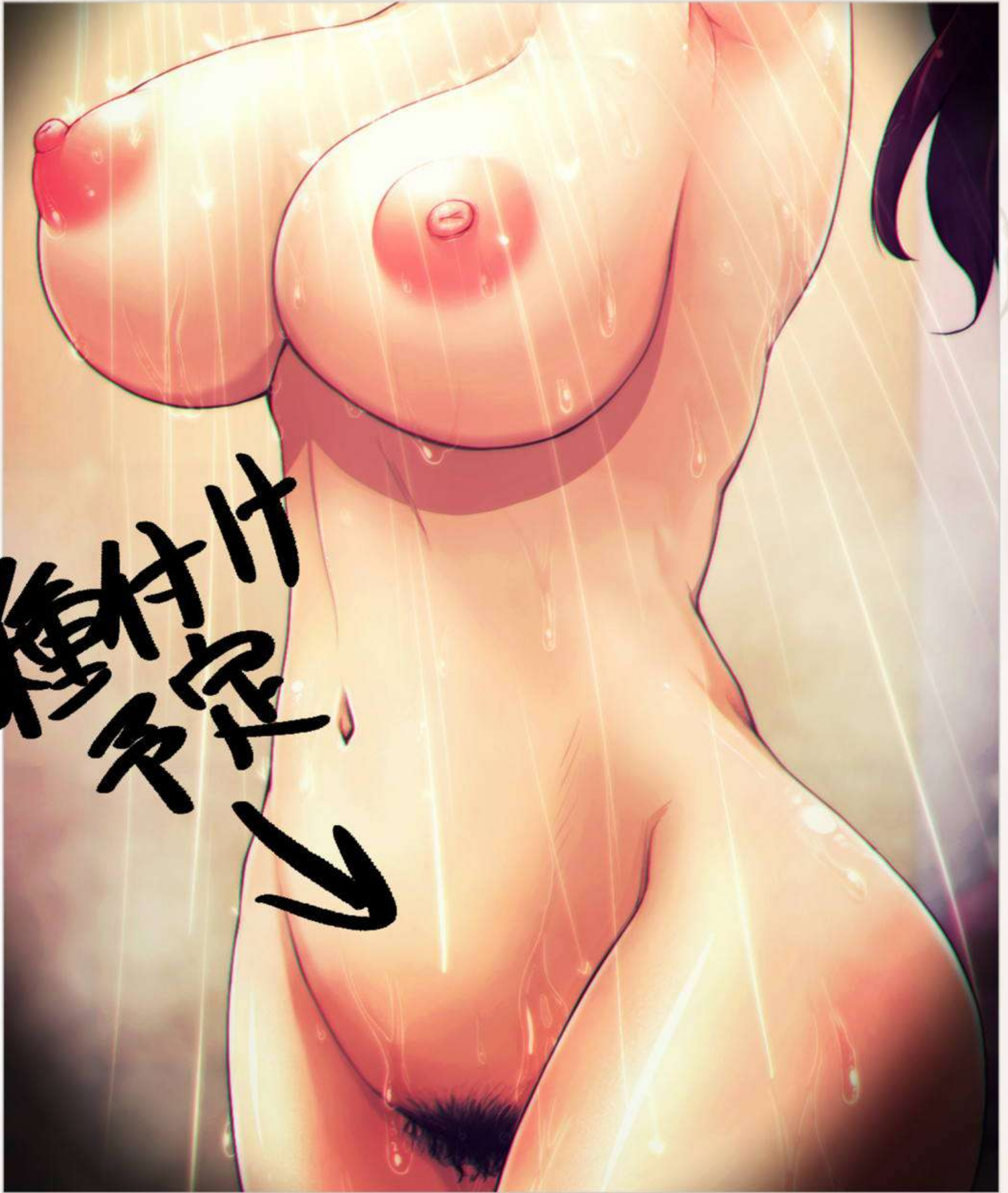




育成 36寸

080-####-####

2019. XX. XX



修女
↓

育代、人妻
大姉

育代、生ハメ用セツル③



挿卵
完了♡
←

済

子育？
頑張る？！w











60分：22000円
90分：32000円
120分：42000円

楽しい時間を
過ごしましょう♡
お待ちしております。

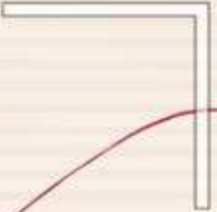
癒し系美人ママ「いくよ」が新しく入店しました！
風俗未経験ですが優しく尽くす性格で当店期待のママです！
顔出し撮影可、AFは現在練習中です。
妊娠は2回目で、1人目の時は母乳が溢れるほど出て困った
とのこと。そろそろ時期なので、豊満なおっぱいから出る
極上の母乳を是非味わいに来てください！オススメです！



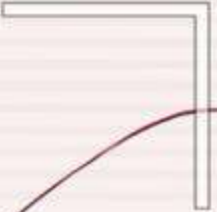








● REC



● REC



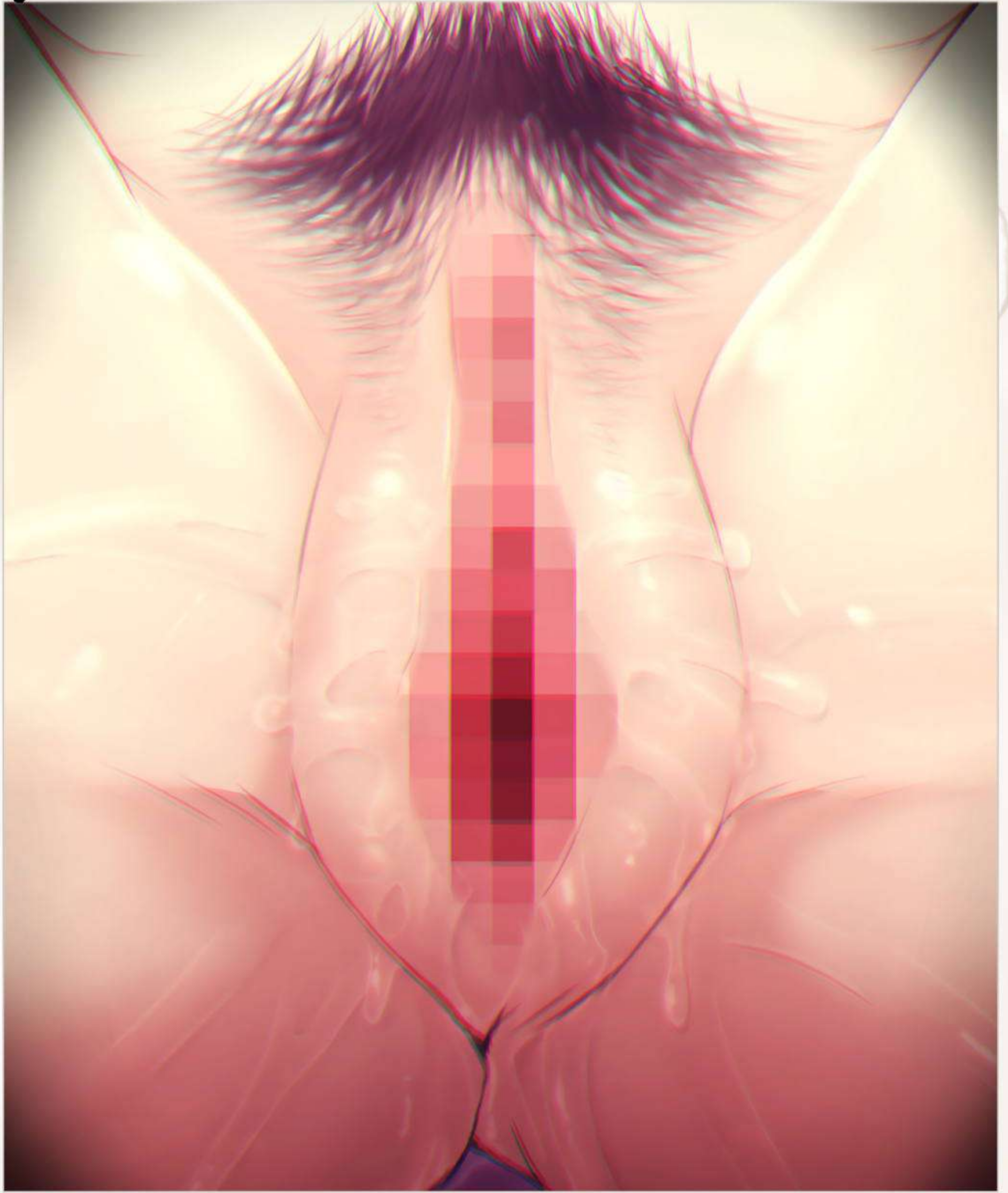
● REC



● REC



育代②



ひとづまんに 使用前

育代. 2回目

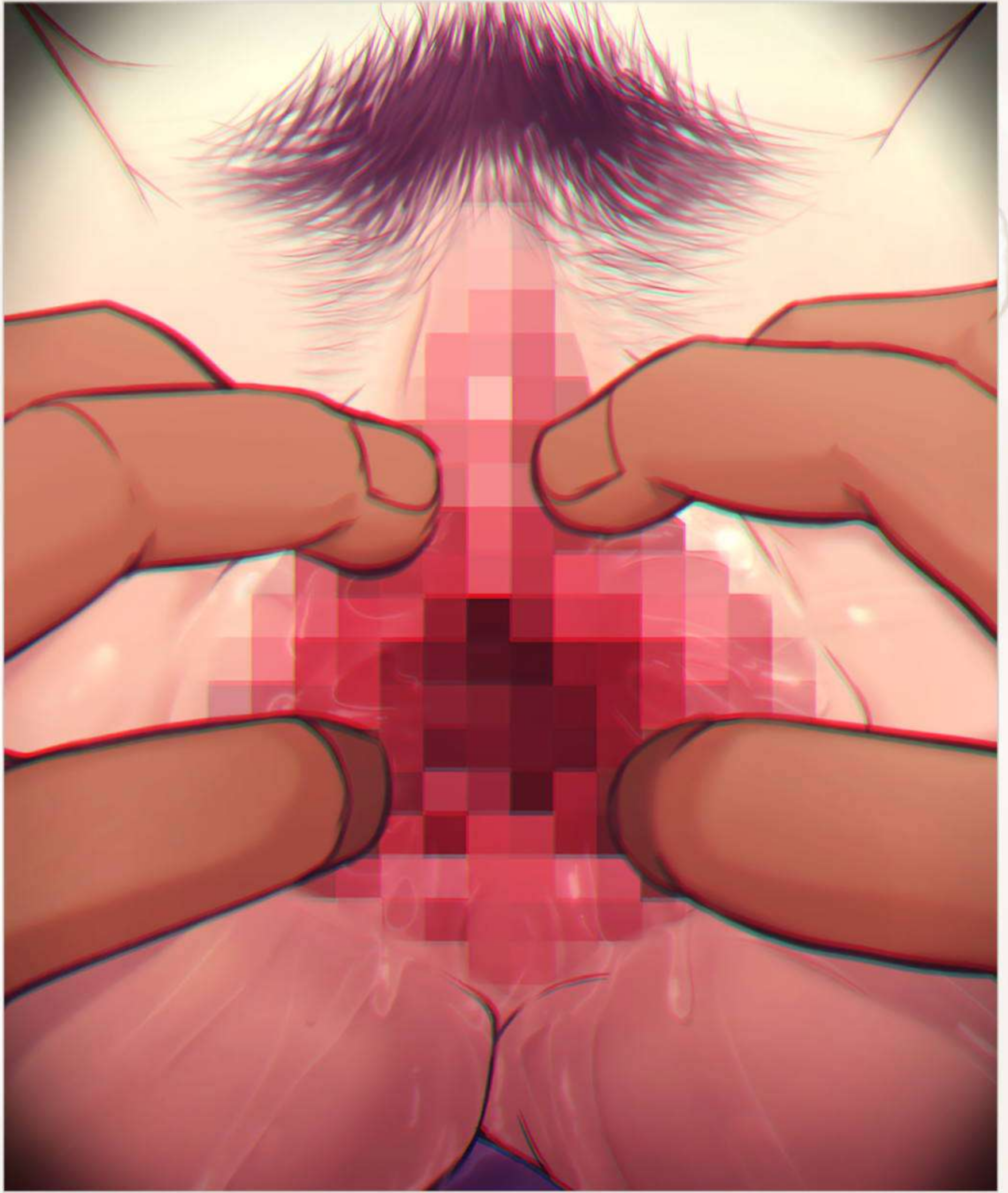
2019.XX.XX



まだ抵抗あり.

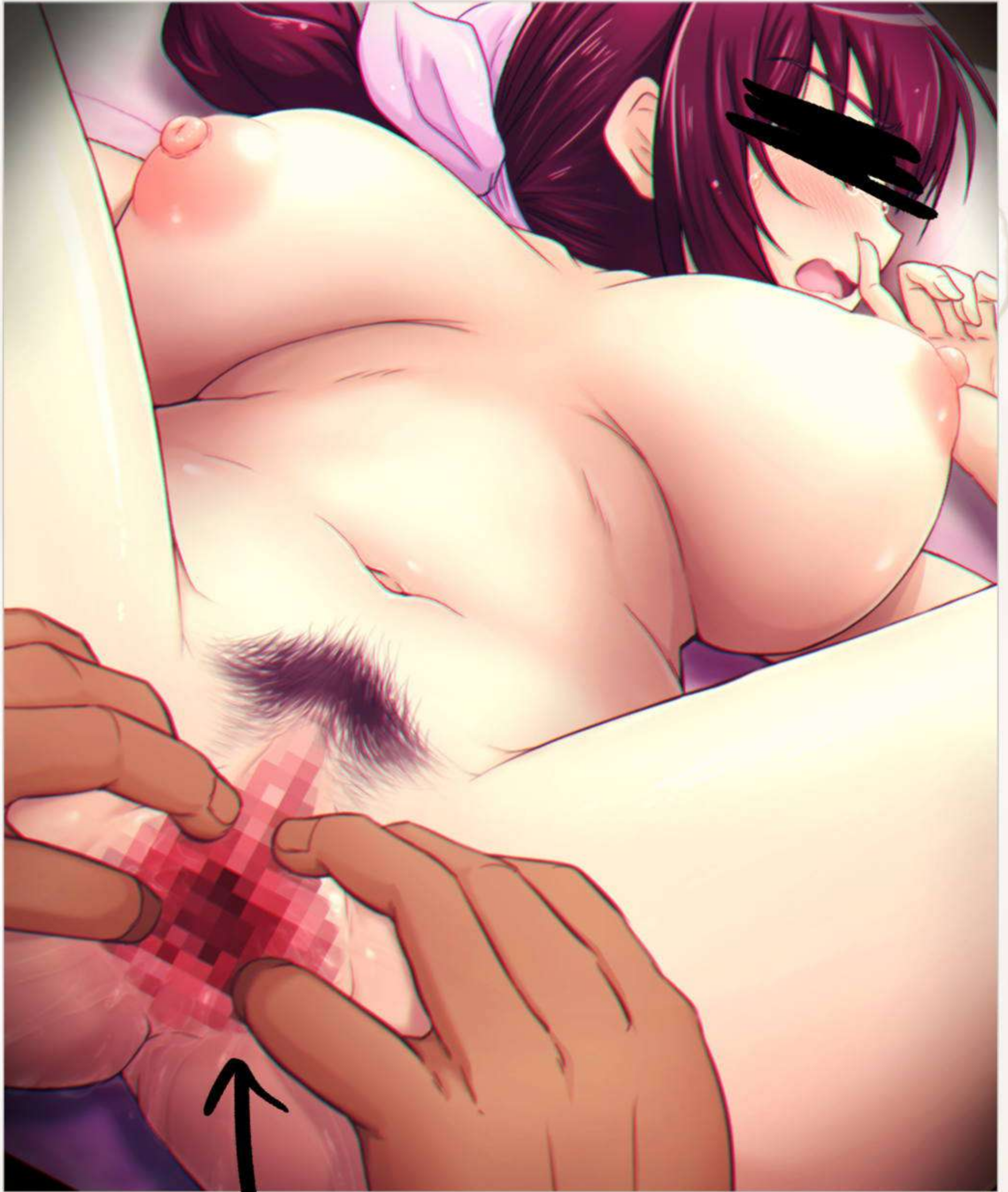


育代②



経産婦の子宮口♡

イヤがらないで♡

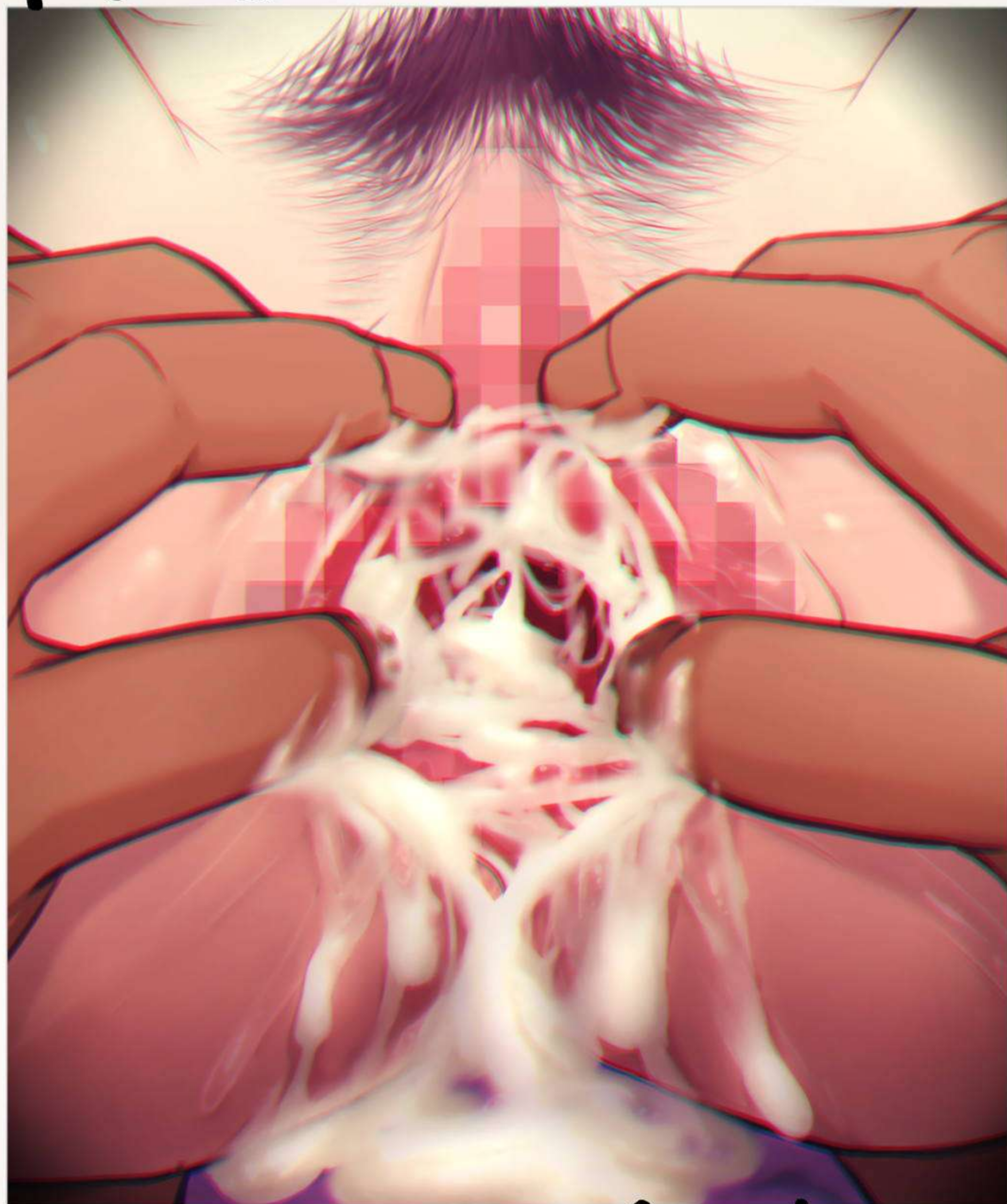


♡はあ♡

キレイなピ、ンで
ピ、ンピ、ンしてるの
エロすぎw



育代②



たっぷり中に射精!
卵子に届け!

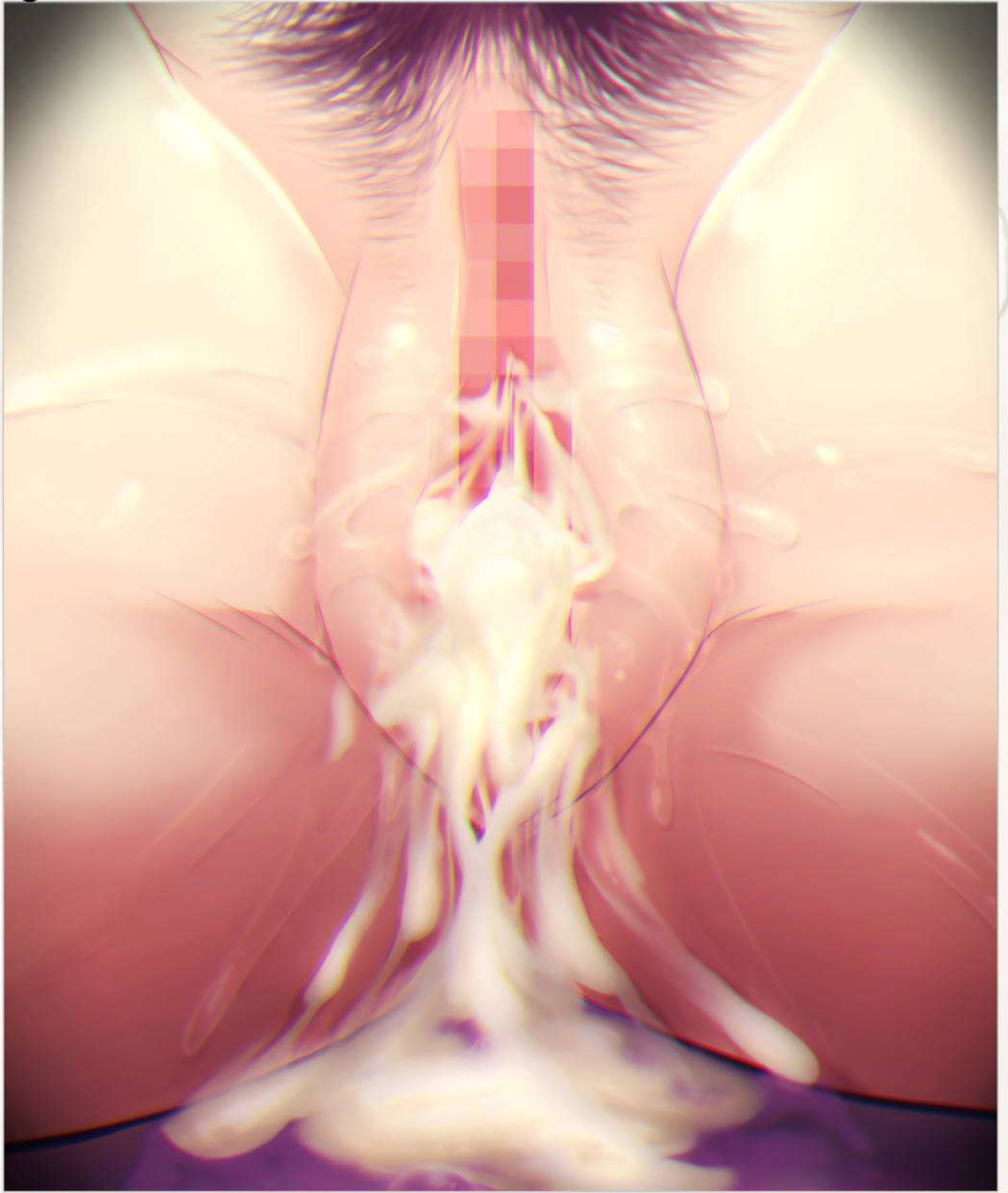
また泣いちゃった～



避妊薬あげたから
大丈夫! (ただのサブリだけどw)



育代②



ひとづまんこ 使用後♡

最後まで
イカす...



←受精しろ!

次はもとイモの
使てやってあげよう

























育代.3回目

2019.XX.XX



キメセツで連続イキ 成功!



ザーメンがかけ
たりあったw

トコけた顔が
Good!



旦那に代わって

胎教中♡

イチナ子が
生まれるぞう

妊娠中の人妻とボテ腹浮気セックス♡



旦那に代わって

胎教中♡

イチナ子が
生まれるぞ♡

妊娠中の人妻とボテ腹浮気セックス♡

育代 (135)



立派なおなか♡



ぶっかけられた姿で
イキまくる育代。



11月21日 母乳がでてきちゃいました♡



18x21から母乳がでてきちゃいました♡



ボテ腹 & 母乳

ママ感あふれる
女体の神祕だね!

工口すぎるから
妊婦風俗とか
向いてそうw



色々な汁まみれで"悦ぶ"育代ママ♡



















やっとキスを受け入れた!
ようやく墜ちそう、調教までうまく
もっていきたい



喘ぎ"声か"
ちんぽに響いて
Good.
たっぷり中出し
してやった

葉なしで
有代と同時イキ達成♡

だいいつ従順になった育代。
中出し後のキスは良い



盗撮して正解だったw
オ十二ーしくゆてありがとう!! w

旦那がいつも言っていた「自慢の笑顔」
いただきました♡



今後会うことを笑顔で承諾。
俺のちゃんぽでしっかりスケベな女に
してやるからな！

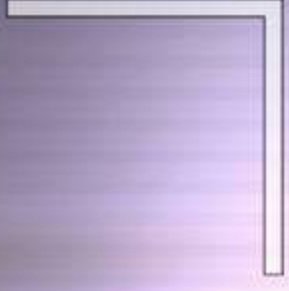


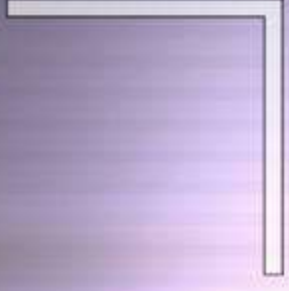


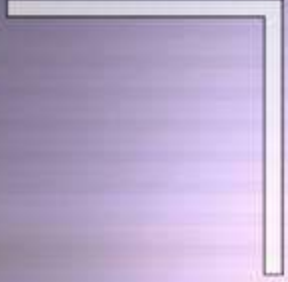




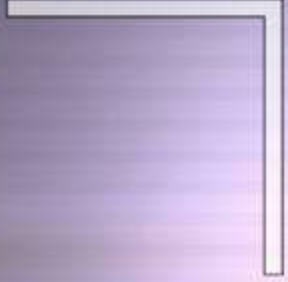












育代

(46)

2019.XX.XX



旦那に下着のお披露目

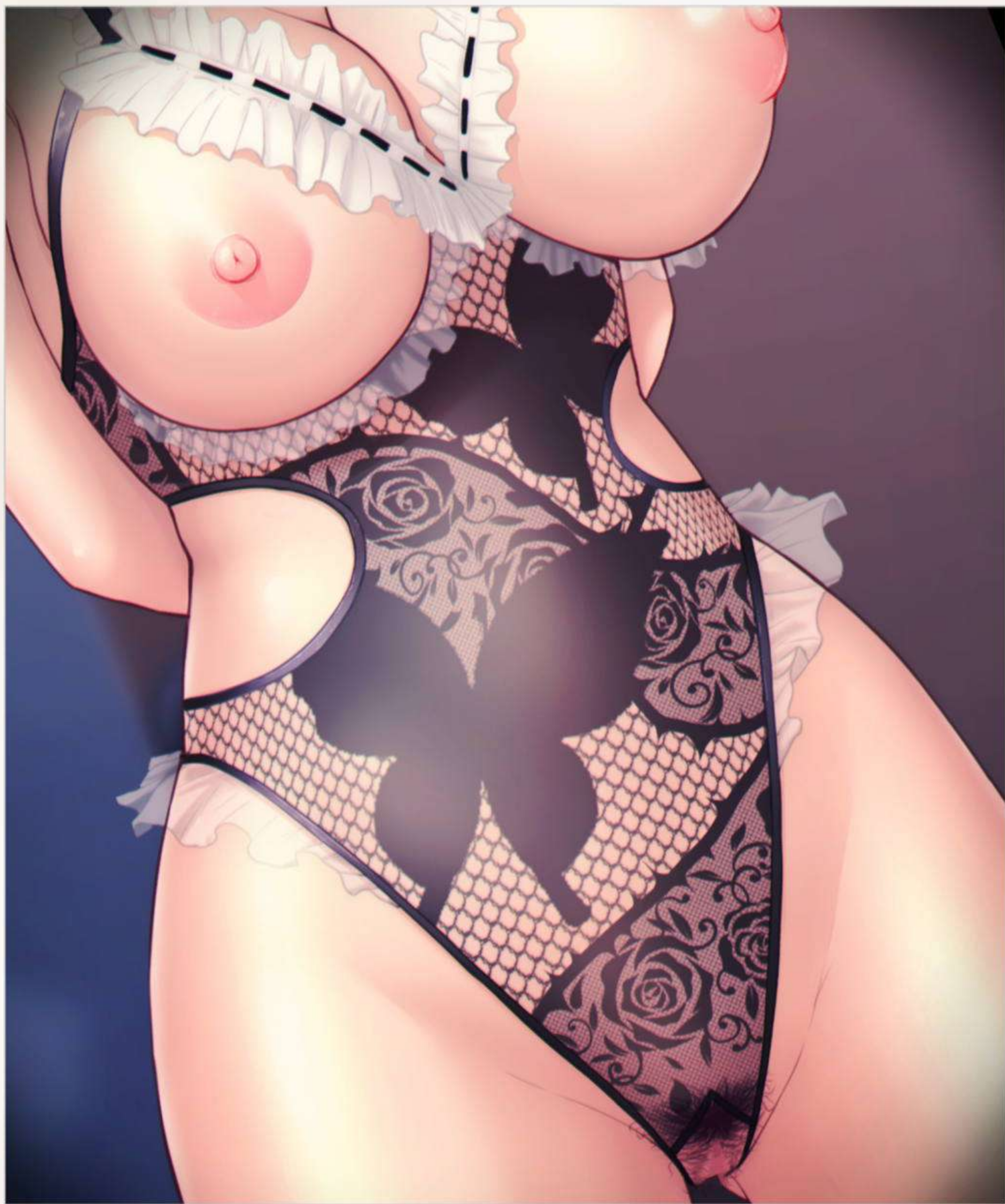
←ニヤけちゅ.23よw



やりたくなぷら ↑
即ハメできて便利!

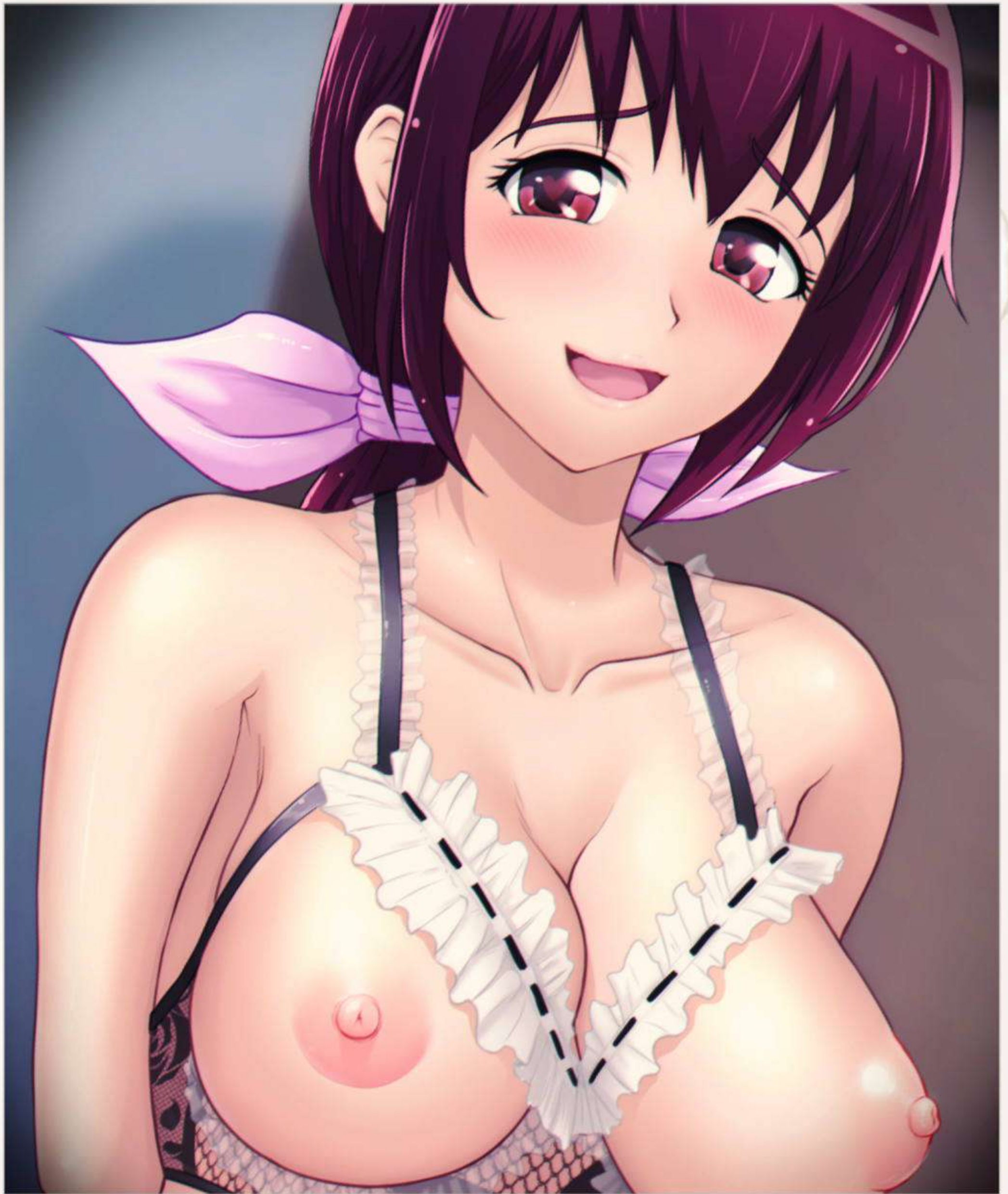
嬉しそう♡
プレゼントした
お礼があるね





蝶口が
似合ってるね〜

キンポ見せた時の育代♡



この日は

上手におぬだりできたので
おワスリも使ってあげました。























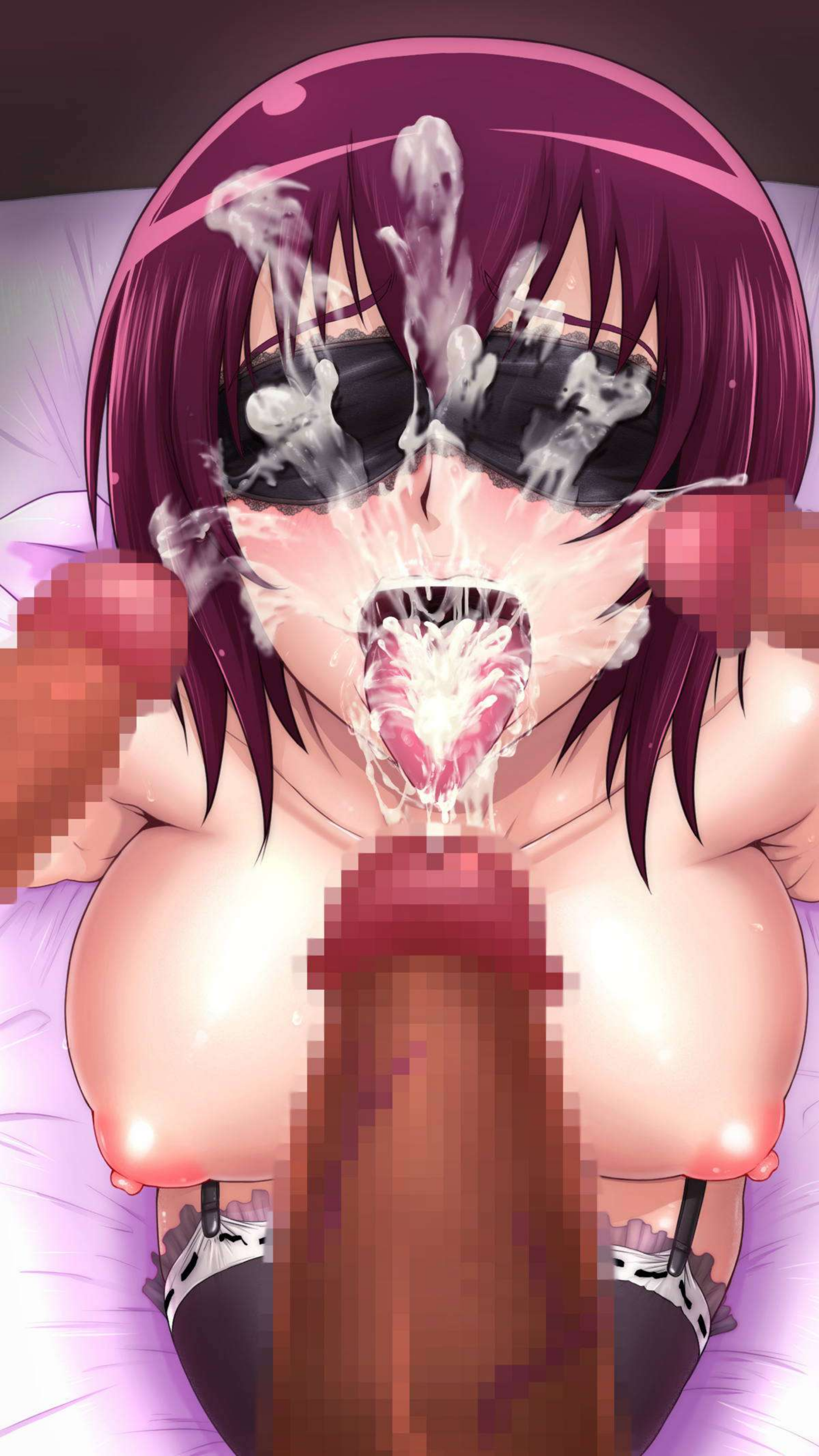














育代 (51)

2019.XX.XX



ぶっかけ調教 4回目。
旦那にオナチヤをプレゼント♡



ぶっぶりの甘〜火を

しっかり受けとめる。

Good.

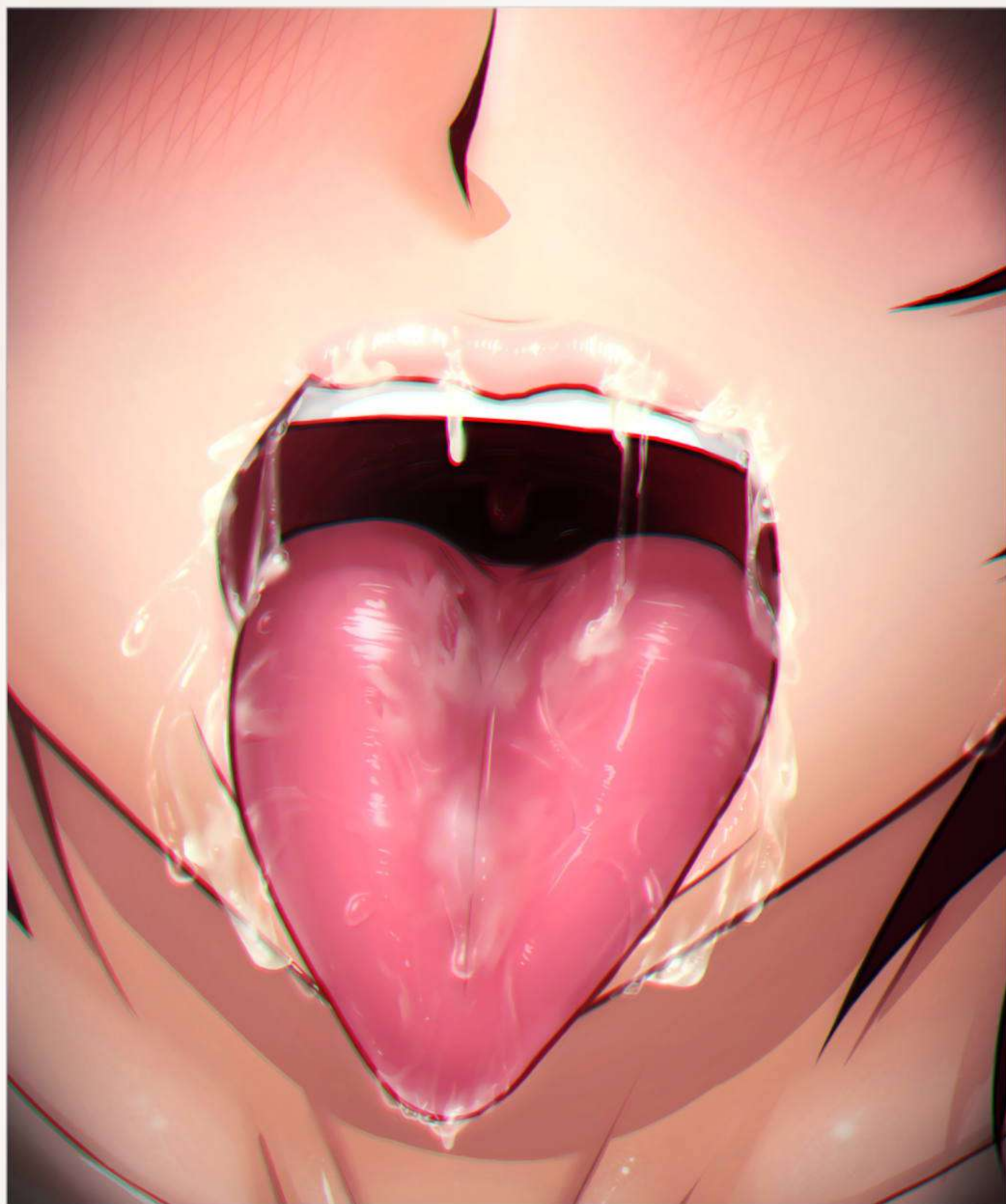


指示する前によく噛んで"
味わいはじめた。

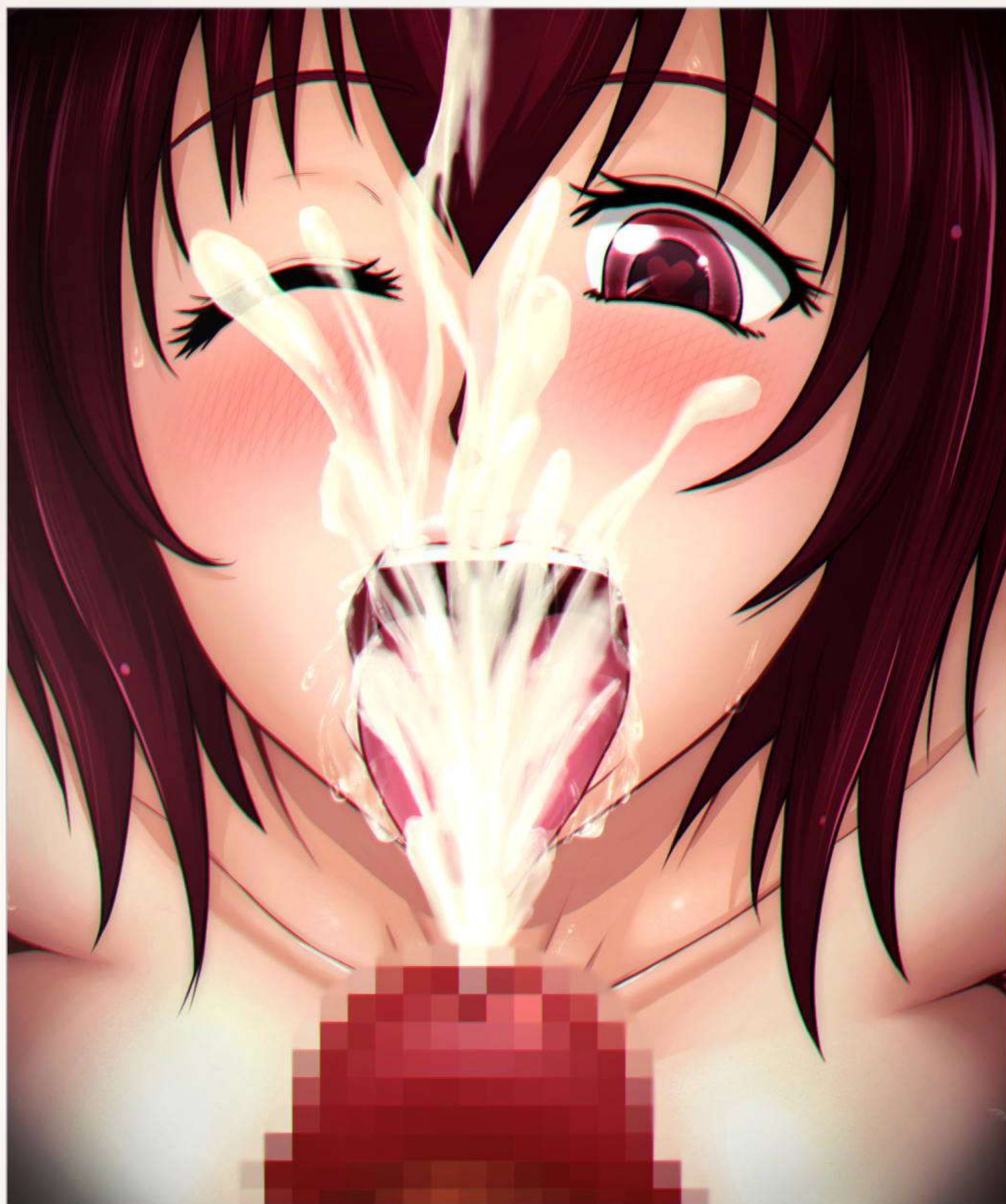
好きだねえ~



もくもく♡
くちゅくちゅ♡



ごっくんできました♡



おかわりを要求されたので
さらにぶっかけ。

♡笑顔♡

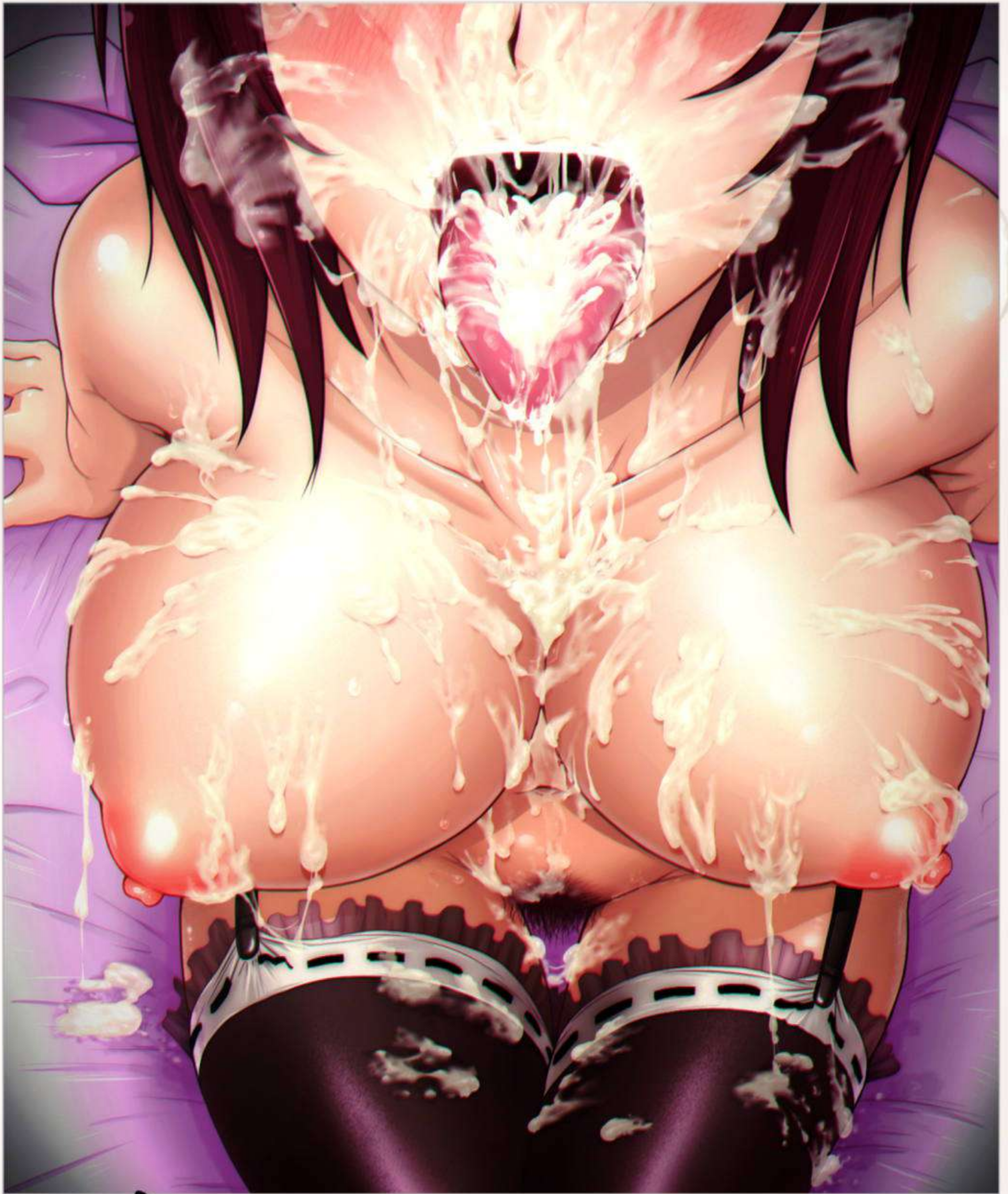


清楚な人妻には
精液化粧が似合う!?



トリプルキンポで
育代も嬉しいそう

鼻ちゅちんで笑わされたw



すっかりキレイになった育代.
マンコびちゅびちゅにして大興奮♡

ドロッドロ♡



ゲームン便女として
公園デビューも近い？
夜のさんぽの時に何本か
又かせるか？



● REC



● REC



● REC



● REC



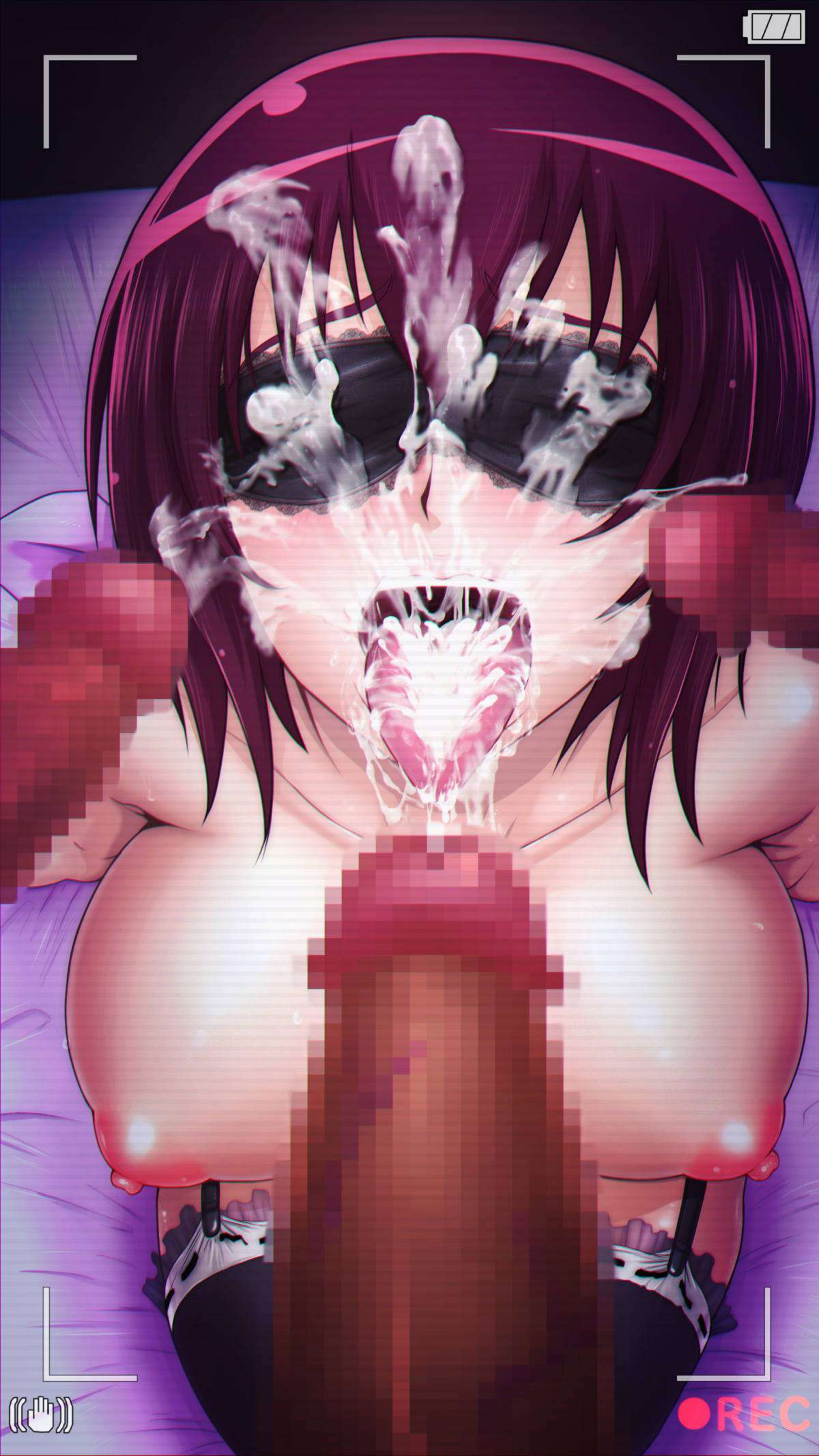
● REC



● REC



● REC



● REC



● REC



抱卵中の人妻とボテ腹淫気セックス♡



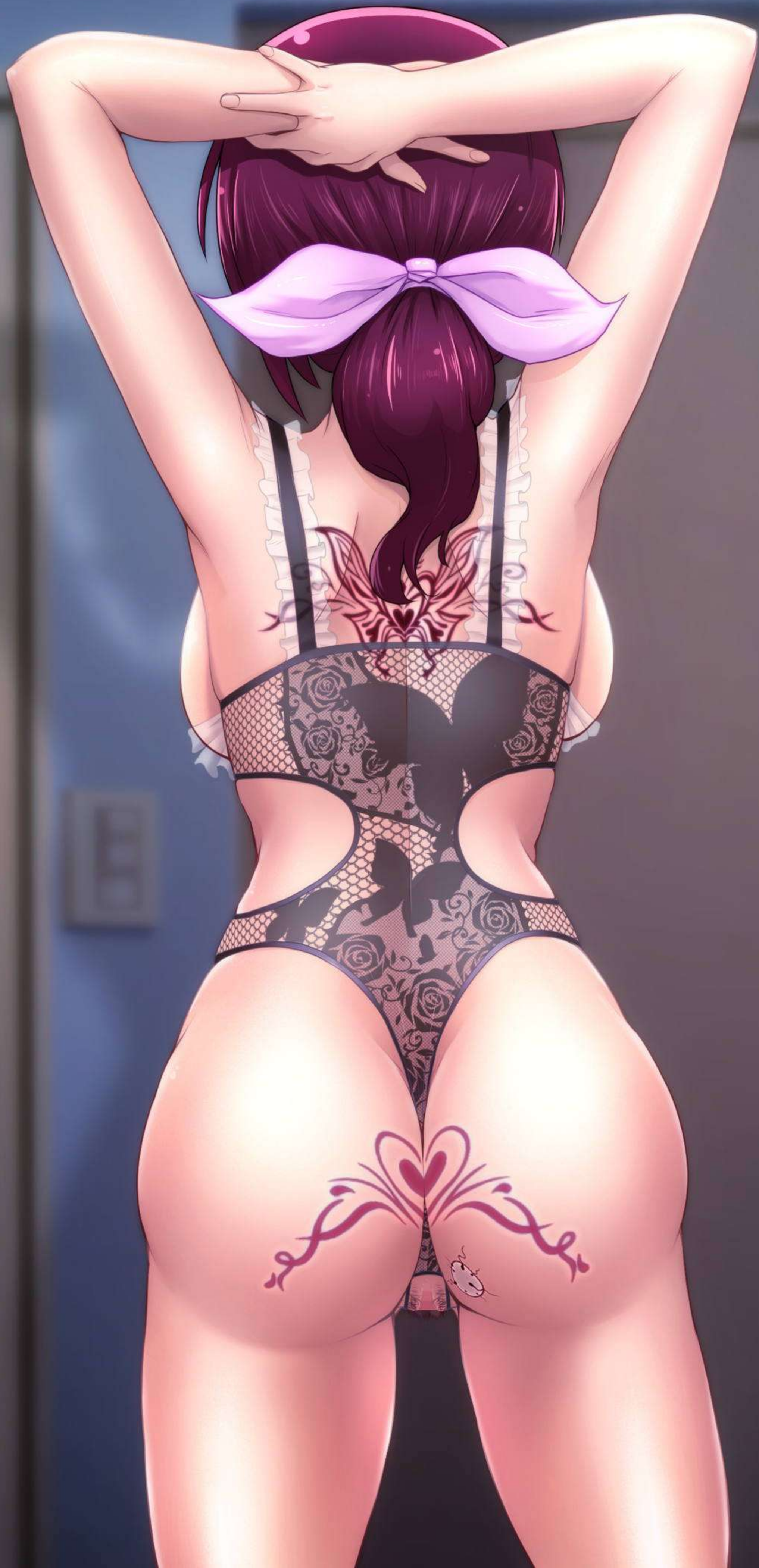
ハメたら母乳がでてきちゃいました♡





























おさんぽ中♡

今なら当たる!
1回500円

排卵♡





[Blacked out eyes]

おさんぽ中♡

今なら当たる!
1回500円

排卵♡

KIRAN



[Blacked-out face]

おさんぽ中♡

今なら当たる!
1回500円

♡
排卵日♡



おさんぽ中♡

今なら当たる!
1回500円

排卵♡

美人妻、夜のおさんぽ♡



夫公認でお付き合いしている男性と露出プレイを楽しんでいます♡
最初はノーパンで歩くだけだったのに今では裸で歩けちゃいます♡
さすがに少し離れた町で、ですけどね。

私、少し前までこんな大胆なこと絶対にできないタイプでした。
……本当ですよ？



この時は声をかけられたら断るなって命令されていたので、本当にドキドキでした♡
すごく興奮して、絶対排卵しちゃってたのでもし中に出されていたら……♡
でも結局誰にも会わなかったもので、車の中で彼にたっぷり注いでもらいました♡♡













